

ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY

ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa
Mitaka-shi, Tokyo 181-8585

TEL&FAX : 0422 33 3320
<http://www.icualumni.com/>
E-mail : aaoffice@icualumni.com



ALUMNI NEWS
VOL.121 MAR.2014

特集 アートとICU

ICU生の強みと弱み : p.10

桜祭りのご案内 : p.14

写真で見る三田会大会 : p.22

ART×ICU

特集 アートとICU

美しさとは？ 醜さとは？ 表現する意味とは？

既成の概念を疑い、答えのない問いに挑み続けるアートの根源にあるのは、ICUが学生たちに求める「Critical Thinking」そのものだ。

アートの世界で活躍する同窓生、研究対象としてのアート——様々な角度から、ICUとアートの知られざる関係に迫ってみた。

インタビュー・構成・文：小林智世 写真：榊島栄一郎・小林智世（ともに本誌）





忙しい授業の合間をぬって、自分の美意識だけを頼りに紙やキャンバスに向かい、カメラを手に撮影にいそしむ学生。自分で何かを作るわけではなくても、授業や普段の生活の中でアートに触れることを楽しんでいる学生。自分がまさにそうだったという人はもちろんのこと、アートになじみがない人でも、ICU祭や学内のイベントで彼らの作品を目にする機会はあったのではないだろうか。今回お集まりいただいたのは、「アート好きな学生」時代を経て美術のプロとなった、美術家の八重樫理彦さんと小泉明郎さん、そしてキュレーターの林寿美さん。泰山荘の芝生に座って学生に戻った気分を味わいつつ、ICUで受けた刺激や現在のお仕事について語っていただいた。



美術に目覚めたのは ICU在学中だった

—— 美術家になりたい人は、まず美大に行くというイメージがありますが、いわゆる普通の大学を出てから美術家を目指すことにしたのは、どういういきさつがあったのでしょうか。

林寿美 ICUを卒業して美術家になるって珍しいケースだと思うんです。お二人がなぜそのような道に進もうと思ったのか、私もとても気になります。

小泉明郎 ICUに入った頃は、美術家になろうとは思っていませんでした。ただ、美術に興味はあったんです。高校時代にカナダに留学した際、美術の授業で「あなたにとって描くことにはどんな意味があるのか?」「その絵は美術史にとってどんな意味があるのか?」ということを実感させてくれた先生と出会い、美術って面白いなと思ったのがきっかけでした。美術や文学など、関心のあることを幅広く学びたいと思ってICUに入り、勉強のかたわら趣味で絵を描いていました。

林 現在主に手がけられているビデオ・アートではなく、絵画だったんですね。

小泉 はい。そして大学三年の時、ロンドン旅行から帰ってきた友達が、面白い展覧会を見たと言って図録を見せてくれたんです。Sensationという現代美術の展覧会の図録だったのですが、それを見て「ロンドンではこんな面白いことが起きているんだ」と衝撃を受けました。翌年には自分も現代美術を見るためにロンドンに行き、そこでブルース・ナウマン(※1)のビデオ・アート作品を見て、自分もやりたいと思ったんです。これ俺にもできるんじゃないかと。まあ、実際やってみたらほぼ不可能に近いのですが。

八重樫理彦 僕は子供のころから絵が好きで、中学時代までは漫画家になりたいと思っていました。家にあった手塚治虫や白土三平の漫画をよく読んでいましたね。あと山も好きで、高校時代は山岳部だったんです。環境問題を幅広く学びたいと思い、当時できたばかりだったICUの国際関係学科に進学しました。でもあまり学問には打ち込めなくて、泰山荘とか本館の屋上でぼんやりする時間が好きでした。サークルはサ

イクリングと民俗舞踊に入っていて、特に民俗舞踊には熱中していましたね。絵は一人で描いていましたが、ICU祭で友達数人と部屋を借りて展示したことがあります。

小泉 あ、それ僕もやりました！ 部屋借りて自分の絵を貼って。

林 じゃあ、お二人とも展覧会デビューはICU祭なんですね。すごい。

八重樫 そして大学四年になり、日本の林業をテーマにした卒論を書いてICUを卒業したのですが、その後の進路がまったく決まっていなかったんですね。でもある時、ここで絵を描く進路を選ばなかったらきっと後悔すると思い、美大を目指すことに決めました。在学中に自分で描いていたデザインを美大の予備校に持って行ったら、見込みがあると思われたのか授業料が一部免除してもらえたんです。一年後に武蔵野美術大学の日本画学科に入りました。

あと、ICU在学中から美大在学時に富士山でガイドのアルバイトをしていたんですが、その時に小泉君は富士山の山小屋でアルバイトをしていたんですよ。実は地上3000メートルで出会ってるんだよね。

小泉 はい、五合目から車に乗せてもらったことがあります。

—— 林さんは、ICU入学時から美術に興味があったのでしょうか？

林 実は、最初は心理学を学びたくて教育学科に入ったんです。でも授業を受ける中で自分は臨床の場より人間そのものに興味があると気づき、二年生の時に人文科学科に転科して、それ以降は宗教・哲学・美術史を中心に勉強しました。卒論の内容は美術史ではなく宗教哲学でしたが、母がよく美術館に連れていってくれた影響で、在学中はプライベートで美術館巡りを楽しみましたね。大学三年の時にはひとりでヨーロッパに旅行し、北はノルウェーから南はイタリアまで各地の美術館を回りました。

私が就職活動をした頃はちょうどバブルの最後期だったのですが、お金を動かす仕事にはあまり興味が持てず、まずは横浜のそごう美術館に学芸員として就職しました。ただ、当時のデパート内美術館は、2週間刻みぐらいで次々に展覧会をしていて、とにかくイベントとして回すという傾向が強かったんです。もっと作品を深く理解して、その世界観を伝えられるような展覧会を、



時間をかけて考えたいと思うようになりました。

そんな時、ICUの寮の先輩が、千葉県佐倉市に開設予定だった川村記念美術館の準備室で働かないかと声をかけてくれました。学芸員資格がなくてもよいという条件とのんびりした土地柄に惹かれ、転職を決めました。準備室では、2012年に退職するまでの23年間、展覧会の企画や図録の作成から美術家やコレクターとの交渉まで、展覧会に関する仕事をひととおり経験しました。今はフリーのキュレーターとして活動しており、今年の夏に開催される「ヨコハマトリエンナーレ2014」のプロジェクトチームにいます。

—— 美術館巡りが好きだったとのことですが、作品を見て、「これなら自分も描けそうだ」と思ったことは……。

林 ないです。一度もないです。

八重樫 そうなんですか。実は、小泉君がナウマンの作品を見て自分も作れるんじゃないかって思ったと言ったとき、自分にも同じことあったな……と。小川芋銭(※2)っていう日本画家の山の絵を美術館で見て、「こんな絵が描けるんじゃないか」って思った(笑)。

小泉 やっぱりね、そういう瞬間がありますよね！

林 きっとそこが、美術家になる人とキュレーターとの違いなんですよ。

学生時代の過ごし方、そして今

—— ICUで学んだことで、今に繋がっていると思うことはありますか？

小泉 一般教養を幅広く学ぶ機会があったことはプラスになったと感じます。現代美術というのは狭い世界なので、広い視野を身につけることの重要性を、美術家になってからより一層意識するようになりました。

あと、在学中に「美術家になりたい」と思い定めてから、前よりも授業が楽しくなったんですよ。森本あんり先生のキリスト教に関する講義も印象に残っていますし、考古学のリチャード・ウィルソン先生が土器のかけらを手に「この土器の模様にはどんな意味があるのでしょうか？」と目をきらきらさせながら問いかけていたこともよく覚えています。

八重樫 僕は逆に、ICUで学ぶ中で、国際紛争や国際政治って、大国とか言ってるけどメンツがどうか、要するに大人の喧嘩じゃないかと思って、全然興味が持てなくなっていました。もともと緻密に考えることは得意じゃなかったと思うんですけど。それよりも、三鷹の雑木林の環境でぼーっとしてる時間が、自分の中にあるものを育んだ気がします。それから、民俗舞踊で身体を使って踊ったりしているうちに自分を解放するというか、自分の中の本能じゃないですけど、何かが目覚めていったのかなと思います。

林 私は、ICU卒という経歴を見た世間の人たちが「英語ができる」と思ってくれたことが、仕事を得るチャンスにつながったと思っています。

しかも、ICUの英語教育のゴールって、「英語で話せる」「英文が書ける」ことではなく、コミュニケーション力をつけることですよね。授業を振り返ってみると、人と人とは究極的には分かり合えないけれど、それでも何かを伝えなければならない時がある、そんな時あなたはどうするのか？と常に試されていた気がします。そうした状況に身を置いたことで、物事を一つの価値観だけで判断しないという感覚が身についたのかもしれない。この感覚は、キュ

レーターとして働く中で非常に役立っていると感じます。美術館に作品を出品してくれるアーティストやコレクターに展覧会のコンセプトを伝える上でも、美術のプロではない一般のお客さんに作品を読み解くヒントを提示する上でも、求められるのはこういった感覚に基づくコミュニケーション力なんです。

もちろん、ICUのリベラルアーツを経たことで、美術史などの専門領域を体系的にしっかり学んでいないというコンプレックスを感じたこともあります。しかしそれは美術史の専門家にはない視点を持っているということでもある。美術館の外で起きていることを冷静に見つめ、それに対し





て美術は何ができるのかを問う姿勢も重要だと思うんです。

作る側、展示する側、それぞれの思い

—— 絵画やビデオ・アートを制作していて、「これで完成だ」という判断はどのようになっているのでしょうか？

八重樫 僕の場合、絵を描いていると、「これで終わりかな」という瞬間が訪れます。うまく言葉にはなりませんが、描き始める時、自分の中には何となくこれをやろうという目標があって、それが達成できたと感じた瞬間が自分にとっての完成です。逆に、やろうとしたことが達成できずに失敗することもあります。どうやれば達成できるのかは、やってみないと分からないです。下絵も描かずに始めてうまくいくこともあれば、色々なやり方を試しても辿り着けないこともある。美大で勉強したからできるようになるものでもないです。

ただ、自分の昔の作品を見ていると、その当時は完成したという実感があったものでも、今の自分には浅く感じられることがあります。自分の見る目が変わってくるので、昔の「完成」と今の「完成」は違いますね。

小泉 僕がやっているデジタルビデオの作品には、「完成」はないです。素材になる映像を撮って編集して作品ができるわけですが、実は展覧会やイベントへの参加が決

まる度に、作品を展示環境に合うように編集し直しているんです。展示する部屋の広さやディスプレイの配置などの条件を見て、自分が表現したいことをお客さんに理解してもらうためにはどうアレンジするのがいいかをその都度考え、映像を手直しします。だから、一つの作品が“完成した”という実感を持つことがないですね。

林 どう展示するか、というのはキュレーターにとっても重要なテーマです。実は私たちは、美術家の意向に全面的に沿って展示の仕方を決めるわけではないんです。美術家の側は「自分の作品をこう解釈してほしい」という意図を持って作品を出してくることが多いですが、それをあえて明確にしない見せ方をするので、作品を見たお客さんが作り手の想像を超えた解釈をする面白さが生まれる場合もあるからです。

あまりにも本質からずれた解釈は問題だけれど、意外な解釈も楽しみたい、というのがキュレーターのスタンスなんですよ。

日常にアートを

—— 一言でお答えいただくのは難しいかもしれませんが、最後に質問させていただきます。アートを生み出すこと、また、アートに触れる意義とは何でしょうか？

林 アートの面白さって、一つの価値観に縛られないものの見方を教えてくれるところにあると思うんです。理解できない作品があったとしても、それが何を意味しているのか考えることで、柔軟な精神を保てるのではないのでしょうか。また、作品が発信してくる何かを感じる力、受けとめる力も養われます。この力は、生きる上できっと役に立つと思います。日常の中に、ぜひアートに触れる時間を作っていただきたいです。

小泉 「現代美術家」というと特殊な職業という印象を持たれがちですが、僕は、自分は他の仕事をしている人たちと大して変わらないと思っています。たとえば画家が絵に黄色い絵の具で色を塗っている時、ただ塗るのではなくて、黄色い色を塗ることにどういう意味があるのかを意識してやっているわけです。銀行でお金を扱う仕事をしている人も、社会の複雑な因果関係の中で、自分がやっていることがどんな意味を持つのか意識しながら働いているはずだし、これまで学んできた様々なことを参考にしながら一つ一つ判断を下して世界に働きかけているという点では同じに思えます。仕事をしているICU時代の友人を見て、アーティストみたいだなと感じたこともありました。仕事やライフワークに対して真摯に向き合っている人は、アーティストもそうでない職業の人も、同じような志を持っている気がします。

八重樫 自分の描く絵が世の中にとってどれだけ意味があるのかはよく分かりませんが、美術家の仕事って、見る人が普段の生活で使っていない感覚を開くことだと思います。僕自身のことを言えば、アート作品を前にして、自分の中になぜこんな感情が湧いてくるんだろう、なぜこの絵に惹かれるんだろうと考える瞬間は、幸せな時間です。作品に向き合っているようで、実は同時に自分自身に向き合っている。アートの世界に触れる習慣がない人にも、この感覚をぜひ味わってほしいです。

(2013年11月23日 泰山荘にて)

※1 ブルース・ナウマン：現代美術家(1941～)。アメリカ・インディアナ州生まれ。60年代後半から、彫刻やネオン管、ビデオなど多彩な素材を組み合わせた立体作品を発表。今日に至るまで、彫刻、写真、パフォーマンス、ビデオ・アート、インスタレーションなど、ジャンルを超えた創作活動を展開。93年にイスラエルのウルフ賞、99年にはヴェネツィア・ビエンナーレの金獅子賞を受賞するなど、国際的評価も高い。

※2 小川芋銭：日本画家(1868～1938)。江戸赤坂生まれ。洋画・漢画を学んだ後、新聞漫画家となる。茨城県牛久市に移住し、農業のかたわら挿絵・漫画・南画などを制作。河童や妖精の登場する幻想的で俳味にあふれた南画が有名。



林 寿美 HAYASHI, Sumi (33 ID89)

キュレーター(フリーランス)。2014年8月から開催される「ヨコハマトリエンナーレ2014」のキュレーターとして、アーティスト・ディレクターの森村泰昌氏らとともに、参加アーティスト、美術館、コレクターとの交渉などを担当。1989年にICU人文科学科を卒業し、そごう美術館に就職。その後、川村記念美術館(現・DIC川村記念美術館)に転職し、学芸員として勤務。2012年に退職後、フリーランスとなる。
おすすめの美術館は……ロスコ・チャペル(アメリカ、ヒューストン)は、死ぬまでに一度は行っていただきたい。バイエラー美術館(スイス、バーゼル)、豊島美術館(香川県)もぜひ。



八重樫理彦 YAEGASHI, Yoshihiko (39 ID95)

美術家。岩手県の早池峰山麓に住み、主に絵画を制作。1995年にICU国際関係学科を卒業。翌年に武蔵野美術大学造形学部日本画学科に入学し、フランス・パリ国立高等美術学校への1年間の留学も経験。2000年に同大学を卒業後は、美術家として各地で個展を開催するとともに、大地の芸術祭などのアートフェスティバルにも参加。2013年、タグボートアワード入選。主催団体ウェブサイト(下記)で作品が購入可能。
<http://www.tagboat.com/>
おすすめの美術館は……常設でいいものを持っているので、DIC川村記念美術館(千葉県)と東京国立博物館(東京都)。



小泉明郎 KOIZUMI, Meiro (43 ID99)

現代美術家。ビデオ・アート作品を中心に制作。1999年にICU人文科学科を卒業後、ロンドンのLondon Institute Chelsea College of Art and Designで映像制作を学ぶ。2004年より世界各地で個展・グループ展に参加。2013年にニューヨーク近代美術館での個展「Project Series 99: Meiro Koizumi」が行われる。また日産アートアワードでファイナリストとなる。森美術館の「[[アウト・オブ・ダウト]展」などの展覧会にも参加。活動情報・過去の作品などはオフィシャルサイト(下記)に掲載。
<http://www.meirokoizumi.com/>
おすすめの美術館は……群馬県出身ということもあり、Hara Museum Arc(群馬県)。古い作品・現代の作品いずれもいいものが見られます。山の中にあるのでちょっとしたハイキングになりますし、伊香保温泉も近いです。

A Interview

林 央子(32 ID88)『拡張するファッション』著者

文：野仲裕子(本誌)



2002年に刊行された本誌（vol.99）に、彼女のインタビューが載っている。
彼女は、個人雑誌でその後のライフワークとなる『here and there』を創刊したばかりで、
そのインタビューを「発行部数も多くない。少数にしか伝わらないかもしれない。
それでも自分の視点を残したい」と締めくくっている。それから11年。
『here and there』はvol.11まで刊行され、彼女が紙という印刷物上で発表し、紹介し続けてきたことが、
今春展覧会という新しいかたちで、水戸芸術館で展示される。
彼女の「視点」は今、出版物を超えてより多くの人に届けられようとしている。

『here and there』——この50から60ページ前後の中綴りの雑誌は、手に取って見たときに初めてその素晴らしさが分かる。A4というフォーマットを保ちながらも、その綴じられた紙の大きさは様々であり、時には、挟まれ、折られ、切られ、そしてそこで使われている紙とインクは、どこまでも自由である。電子書籍が浸透する中、改めて紙だからいや紙にしかできないことがあると気づかされる。

この雑誌は一人の女性編集者が手がけている。パリや日本を中心とした、作家、アーティスト、ファッションデザイナー、写真家など、国境を超えて彼らに執筆を依頼し、自身でも記事を書き、時には撮影をし、英語から日本語への翻訳を手がけ、そして編集する。ICUを卒業後、資生堂の『花椿』編集部を経て、2011年、雑誌ライターとしての仕事をまとめた著作『拡張するファッション』を上梓。彼女のこれまでと、これからについて話を伺った。

おしゃれの入り口に立った高校生活

茨城県日立市出身。県立の進学高校に通い、比較的自由な高校生活を楽しんだ。「制服ではなかったので、帰り道にちょっと喫茶店に寄ったり、ウィンドウショッピングをしたり。ミニ大学生活みたいなものを満喫していました。」洋服好きの友人がいたこともあって、『mc Sister』などを好んで読んでいた。当時は、アイビールックが全盛。「でも私はあまり好きではなくてグレーとか比較的モノトーンのものを好んで着ていたような気がします。自分が見える範囲で、おしゃれを楽しんでいましたね。」

高校時代、英語の副読本を読むのが好きだったという。その一方で、翻訳された海外作品を読むと、日本語訳への違和感からかどうもすんなり読めないことが多かった。「自分で原書を読もうとまでは思いませんでしたが、そこで翻訳という世界に興味を

もったのかもしれませんが。」建築にも興味を持ち、高校生の頃は理系の勉強もしていたという。「その頃から、クリエイティブなことは、漠然と好きでした。」

英語コンプレックス

建築関係に進路が揺らぎながらも、土壇場でICUに入学。母親が5期生だったこともあり、ICUのキャンパスには幼いころから親しんできた。しかし地方の高校で普通の英語教育を受けてきた彼女は、入学後、帰国子女など英語をネイティブのように話す人たちがたくさんいる環境に圧倒される。「自分は落ちこぼれだなんて思っていました。特に話す方が苦手です。」しかし彼女の劣等感はある出来事をきっかけに大きく変化することになる。「在学中にイギリスに留学していた友人を訪ねていったのですが、彼女は帰国子女でアメリカンイングリッシュを話すんです。ふたりで駅に切符を買いに行くと、帰国子女の彼女でも窓口で

英語が通じないこともある。でも言い方を変えたり、何とか伝えようと試しているうちに、通じるんですね。英語って相手や場所によって、通じる、通じないということもあるし、上手い下手ではなくて、伝えようとすればいいんだなって思えるようになりました。」

共通の趣味を持つ友人たちといえることが多かった高校時代。一方ICUでは帰国子女など自分が知らなかった世界を持っている人と接することが増えていった。「似た考えの人というより、違う考えの人があるんだな、いていいんだなって思いました。みんなが得意な英語が私は得意じゃない。アメリカの文化が良くて、日本の文化が劣っているというような学内の価値観にも、少し違和感がありました。共通項が少ない人たちの中で、いい意味で自分自身は何だろうって自分を見つめる時間をもらいました。」ファッションとは無縁な印象があるICUだが、その後パリ・コレ取材するこ

とになる彼女はどんなファッションをしていたのだろう。「入学してすぐは、オリーブ少女でした。でもあまりにも浮いてしまうので、後半は女子大生ファッションをしていました。ヘアスタイルもワンレングスでしたし（笑）」

『花椿』とパリ・コレクション

雑誌メディアに就職を希望していたこともあって、卒業後は資生堂に入社し、『花椿』の編集部配属される。「当時資生堂にはインウィというブランドがあって、そのクリエイティブ・ディレクターをしていたセルジュ・ルタンスのインタビュー記事を読んだときに、資生堂はクリエイターを大切にすることが、興味を持つきっかけになりました。」入社して4～5年アシスタントをし、1993年に取材で初めてパリ・コレへ。パリ・コレはとにかく忙しかったという。「ショーを見る前に、招待状を確認したり、チケットをとったり、ショーはパリの町中で行われるので、地図を調べて、どうやってショーを回るかプランを練って……。メゾンによっては、1時間とか開始時間が押すところもあるんです。そうなるとせっかくプランを立てたのに、どうしようって（笑）1日に7～8本は見えていましたね。」

毎年パリ・コレに取材に行く中で、ある時から新人のデザイナーを紹介するページを担当することになる。「すごく活気はあるのだけれど、大きなニュースの枠組みからはこぼれ落ちてしまうようなショー、それが私の取材対象でした。写真はもちろんカメラマンにも頼むのですが、私自身が見て感動したことを、そのまま伝えたいということから自分で写真を撮ることも多かったんです。」当時『花椿』のアート・ディレクターだった仲條正義さんに「編集者が自分の目線で撮った写真のほうが良く伝わる」と言ってもらい、文章とともに自身が撮った写真が採用された。「パリ・コレってインターナショナルな場なので、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダなど英語を母語としない人がたくさん集まってきていました。そんな中でみんな慣れない英語を使いながら、コミュニケーションしようとしている。私も帰国子女レベルの英語を目指さなくても、必要なことが伝わればいいと思うようになってきました。自分の興味のある人に出会ったとき、この人とコミュニケーションしたいと思えば、自ずと言葉はついてくるものですね。」パリ・コレで新人の発掘や、国境を越えた人たちへの取材を重ねるうちに、彼女はたくさんのクリエイターたちに出会っていく。「パリ・コレで出会った、デザイナー、アーティストの中には、今でも良い関係が続いている人がたくさんいます。当時はくファッションデザイナー>という肩書きでは括りきれ

ない、領域越境的なつくり手が出てきた頃です。90年代に、私は仕事を通してすばらしい才能に出会わせてもらいました。」

彼女が籍を置く『花椿』は月刊誌。編集会議では次々と新しいことが求められてくる。パリ・コレで出会ったすばらしい才能をずっと見続けていきたい。そう思う彼女と、『花椿』で求められるスピード感との間に少しずつ距離ができはじめていた。会社の仕事をしながらも、自分のアイデアで作る「本と雑誌の中間のような出版物」をまとめたいと考え、実践。『花椿』のために書いたパリ・コレのレポート一年分と、自分が興味を抱いた場所の紹介や友人との交流の記録など、仕事と余暇をミックスした『パリ・コレクション・インディヴィジュアルズ』（リトルモア）を1999年に刊行。これが、この後の彼女の編集スタイルを確立していくものとなる。

『here and there』の創刊

2001年に資生堂を辞め、フリーランスの編集者になってすぐに『here and there』という個人雑誌を創刊する。前述の『パリ・コレクション・インディヴィジュアルズ』を出したことが、彼女が新しい雑誌を始めるための良い下地になっていた。「人って何かを始めるときに、先が分かって始める人っていないと思うんですよ。成功するのかどうなのか、実際にはわからない。でも、こうやって先人がいなくてもやろうって思える強い気持ちというか、ひとつのことに興味をもって続けて行く精神力みたいなものは、ICUで培われたものかなって思っています。」自費出版で少数数、取り扱っているお店もごく限られている、そうやって『here and there』をスタートさせた彼女には、ある考えがあった。「マスなメディアがある一方で、こういう個人のメディアがあってもいいかなって思っていました。メディアはマスになるほど、執筆者は記事の中で自分を消さなければいけない。でも私は人が文章を書く以上、その言葉を発している個人は消せないと思うんです。消さないけれども、文体や編集を通して一番いい形で伝えていきたい。だからこういうやり方を選んだんです。」タイトルは、『花椿』時代に知り合い『Purple』というインディペンデントなアート雑誌の編集長をやっていた長年の友人であるエレン・フライスに付けてもらったという。「意味ですか？彼女は自由な発想を持っている人ですからね。聞いても答えは出ないんじゃないかな（笑）」

拡張する展覧会

2011年に、フリー時代の執筆やインタビューをまとめた『拡張するファッション』（スペースシャワーネットワーク）を上梓。彼女がメインで関わってきた『流行

通信』や『STUDIO VOICE』が次々と休刊し、雑誌がより広告主寄りになっていく中で、「今残さないと、自分の仕事はもう残せないかもしれない」という危機感があったという。「ファッションに対して個人的な視点で書かれたものを、書店流通という枠の中で発信できるのか？ わからないけれど、挑戦してみたいと思いました。本というものは、人が通過して行く装置みたいなものだと考えていて、作り手の行為を見たり読んだりした人が、それぞれに感じて通り過ぎて行く。そういうものにしたかったんです。」そうして出した本への反響の中に、今回展覧会をやりませんかと声をかけてくれた水戸芸術館の主任学芸員からのもがあった。「『これは、展覧会になる本だと思いました』と言っていただきました。自分では考えてもみなかったことなので、本当に嬉しかった。」彼女が印刷物の編集を通して、他の人たちに伝えたい、紹介したいと思ってきた、決められた枠組みを拡張しようとする作り手たちの活動が、今度は別次元の空間である美術館というパブリックな場で表現されようとしている。「1冊の本が展示という形で新たに表現されることで、色々なプロセスを踏んでさらに成長していく。こんなに幸せな本はないと思います。」今は展覧会カタログの編集で忙しいという。展示では本に出てきた人たち以外にも新しい作家も紹介される予定だ。彼女と長く付き合いのある写真家ホ

ンマタカシさんの作品展示や、『here and there』のアートディレクターである服部一成さんの展示、ミランダ・ジュライの映像作品、長島有里枝さん、ファッションブランドのCOSMIC WONDER、BLESS／小金沢健人さんのインスタレーションなど、彼女が長い時間をかけて大切に見つけてきた才能が一同に見渡せる。「自分自身でもどんな空間になるのか、すごく楽しみです、高校時代を過ごしたところで、展覧会をすることができてとてもうれしいです。」



HAYASHI, Nakako

茨城県生まれ。教育学科卒。卒業後、資生堂に入社し『花椿』誌の編集に13年間携わる。2001年よりフリーランスとなり、様々な雑誌に寄稿。2002年に『here and there』を創刊し、2012年までにvol.11まで刊行。これまでの作品は『パリ・コレクション・インディヴィジュアルズ』『同2』（リトルモア）『拡張するファッション』（スペースシャワーネットワーク）など。好きな美術館は、東洋文庫ミュージアム（文京区）と朝倉彫塑館（台東区）。「小さくプライベートに近い空間で落ち着きます。兼六園や谷根千も近いので、お散歩ついでにいかがでしょうか。」ウェブサイト：<http://nakakobooks.seesaa.net>
＊『here and there』の購入については、Utrecht（ユトレヒト）：<http://www.utrecht.jp> まで

Information



COSMIC WONDER 〈COSMIC WONDER RESTAURANT〉2013 年
撮影：ホンマタカシ

▼開催概要

展覧会名 | 拡張するファッション

会場 | 水戸芸術館現代美術ギャラリー

開催日 | 2014年2月22日(土) ～ 2014年5月18日(日)

開館時間 | 9時30分～18時(入場時間は17時30分まで)

休館日 | 月曜日 ＊ただし5月5日(月・祝)は開館

入場料 | 一般800円、前売り・団体(20名以上) 600円

中学生以下、65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名は無料

【一年間有効フリーパス】

・「ハイティーンパス」(15歳以上20歳未満)：1,000円

・「おとなのパス」(20歳以上)：2,500円

主催 | 公益財団法人水戸市芸術振興財団

助成 | 公益財団法人朝日新聞文化財団

協力 | アサヒビール株式会社、イマジン・アートプランニング、エプソン販売株式会社、有限会社野口装美、フォトグラファーズ ラボラトリー、BUGHAUS、Diptrics Inc.

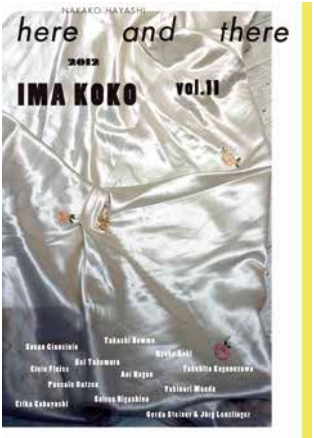
企画 | 高橋瑞木(水戸芸術館現代美術センター主任学芸員)

企画原案 | 林 央子

お知らせ | 本展終了後、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に巡回いたします。

会期：2014年6月14日(土)～9月23日(火・祝)

本展カタログは2014年春、DU BOOKS(株式会社ディスクユニオン)より全国発売予定。





A_People

各ジャンルで活躍の同窓生を紹介

文：赤松弥生（本誌）

鶴留尚子 (48 ID04) 銅版画家

学生時代、スケッチをすることは対象をよく観察することだと気付いた。いつも持ち歩いているスケッチブックが、全ての作品の出発点。

つるどめ なおこ（TSURUDOME, Naoko）
2007年に渡仏。同年、パリのアトリエ・コントロールポワンで一版多色刷りの銅版画を始める。2009年、「entre les deux」（2人のあいだ）により第2回メゾン＝ラフィット・アート・サロン大賞受賞。以後、パリで本格的に版画家として活動。2013年には東京で個展を開くなど、日本での発表も増えている。

2013年10月、日本橋三越本店で開催された「フランス現代アートの世界展」。

優しい色合いの版画が並ぶ一角に置かれた展示会の写真。その中に作家である鶴留尚子さんの近影が収められていた（上写真、左）。「少年みたいでしょう」ギャラリーの担当者が話しかける。「この方は変わった経歴の持ち主だね。大学が美術系でないせいか、作風も自由で面白くて」

同窓生ですと告げるタイミングを逸したまま、色とりどりの版画作品を見せてもらう。包み込むような色彩、繰り返し登場する動物などのモチーフ、独特の間（ま）。そこには鶴留尚子の世界というものが確かに存在していた。

今回は、フランス在住の鶴留さんにメールでお話をうかがった。

パリで版画家になる

ICU卒業後、しばらく東京で働いていたが、一度海外に住んでみたい、若いうちに色々な国に行っておきたいという気持ちが強かった。まず頭に浮かんだのが、学生時代の旅行で、すっかり気に入ったフランス。思い立った勢いで、数ヶ月後にはフランスの土を踏む。2007年のことだ。

特にパリは美術館やギャラリーが多く点在し、文化的な刺激を受ける場所であると同時に、歩いてどこへでも行ける、こぢんまりとしたところが気に入っている。古い建物と緑に囲まれ、いくら歩いても飽きない。

一方で、版画にはずっと以前から興味があった。学生時代は趣味で消しゴム版画を作っていた。何より、小さい頃から本が好きで、本を作りたいという気持ちが、いつしか版画へ興味を抱ききっかけとなった。

パリに移住後、銅版画を始めたいと思い、できる場所を探したところが偶然、ピカソやミロも制作していた歴史あるアトリエ・コントロールポワン（旧アトリエ17）だった。ここの専門は、一版多色刷りのエッチング（銅版画）技法。1枚刷る毎に版からインクをふき取る必要があるが、始めた当初は何の知識もなく、この技法が珍しいということも、知らなかった。

「無知の強みでしょうか」
一版多色刷りから入ったため、それが当たり前。手間と感じたことはない。この技法では、1枚の版の上に複数の色を同時に載せ、一度に刷る。結果、版の上でインクが混ざり合い、元の色とは違う微妙なニュアンスが出る。そこが面白みでもある。

版画を制作するようになって約3年後、友人の勧めでアーティスト組合（プロのアーティストが加入する団体）に加入。「おそらくその頃から、好きだから作る、というだけでなく、アーティストを職業として考え始めたと思います」

作品のはじまりはスケッチから

作品に登場する様々なモチーフは、どのように決まるのか。
「描きためたスケッチからです」

スケッチをするようになったのは、学生時代だ。

ICUではイヤーブックに所属し、写真を撮ることが多かった。暗室での現像作業が好きで、今思うと、1枚の写真を作り上げる工程は、下絵、版作成、印刷、と各段階を経て完成させる銅版画に似ていた。

だが、大学の長期休暇のたびに出かけた海外旅行先でスケッチをするうち、気付いたことがあった。

写真は瞬間が勝負だが、スケッチでは、一定時間、対象を見つめ、細部まで観察するため、より記憶にとどまる。それ以降、徐々にスケッチに移行していった。

今も常にスケッチブックを持ち歩き、気になるものがあるとスケッチをする。

地下鉄のなか、道行く人、友人との会食で出てきた食べ物、ベランダで育てた野菜や花。日常で目にする全てのものが、題材となる。旅行先でもカメラを持たず、かわりにスケッチにとどめる。

こうしてたまったスケッチのなかから、目に留まったものを1枚にまとめていく。頭に構図が浮かんだら、創作の半分は終わったようなものだ。あとは、それを作品に仕上げていく。

作品を作りながら、タイトルも考える。たいていがフランス語だ。日本語に訳すと、「眠りに落ちる2秒前」、「魔法を少し、夜にまぶす」など。

タイトルも作品の一部だ。詩的でウィットに富んだタイトルがうまく見つかったら、全体が引き締まる気がする。フランス語の言い回しやことわざから、言葉遊びをすることもある。母語でないからこそ、その言語に対してより自由でいられる。タイトルを通してフランス語で遊ぶ感覚。これが作品を仕上げるエッセンスだ。

2人のあいだ、4月は気まぐれ

こうして完成した作品には、変わったタイトルやモチーフが見られる。

たとえば、2009年第2回メゾン＝ラフィット・アート・サロンで大賞を受賞した「entre les deux」（2人のあいだ）。詩の一場面であるかのように、多くの動物や物が登場する。

まず、蛇がキリンのマフラーになっている。クロワッサンにカフェオレ・ボウル。黄色いテーブルクロスにうっすらと描かれている模様は、オランダの友人の家に飾ってあったアザミの花。

一見、断片的だが、作り手のなかでは、個々のモチーフに具体的なイメージがあり、それぞれがひとつの世界を作りだす。あとは作品タイトルと合わせて、観る者が自由にストーリーをつむぎだしてくれれば、と考えている。

または、「Le mois d' avril est réputé capricieux」（4月は気まぐれ）という作品（上写真、右）。ある年、4月初めとしては大分暖かく、通常より早い春の訪れが感じられた頃のこと。植えていた白いヒヤシンスの花びらに、一筋だけ赤い線が現れ、何かの吉兆のように思われた。ちょうど新聞の長期予報を読んでいると、「4月は気まぐれで有名である」という一節が目に残る。見た瞬間、頭の中で、このヒヤシンスを題材にした版画と結びついた。

完成作品では、ヒヤシンスの隣に山羊が並んでいる。caprice（気まぐれ）から山羊が着想されたようにも見える。

今後について

現在の活動はフランス中心だが、日本や他の国にも発表の場を広げてゆきたい。また、作品とそのタイトルのように、イメージと言葉の関係に興味があるため、本や雑誌の挿絵の仕事もしてみたいとのこと。

版画に惹かれた最初のきっかけは「本が好き」なことだった。その鶴留さんの版画が本とひとつになったとき、どのような世界を作り出すのか、ぜひ見てみたい。

突撃! 気になるあの“メジャー”

第8回 リチャード・ウィルソン教授(美術・文化財研究)

「美術史」ではなく「美術・文化財研究」？ 学ぶ内容が想像しづらいメジャー名ですが、一体どのような意図で「美術・文化財研究」メジャーは生まれたのでしょうか。担当教員のリチャード・ウィルソン教授に語っていただきました。

文・写真：小林智世、佐々木淳子(本誌)

モノの本質を見る目を養い、 隠されたメッセージを読み解く

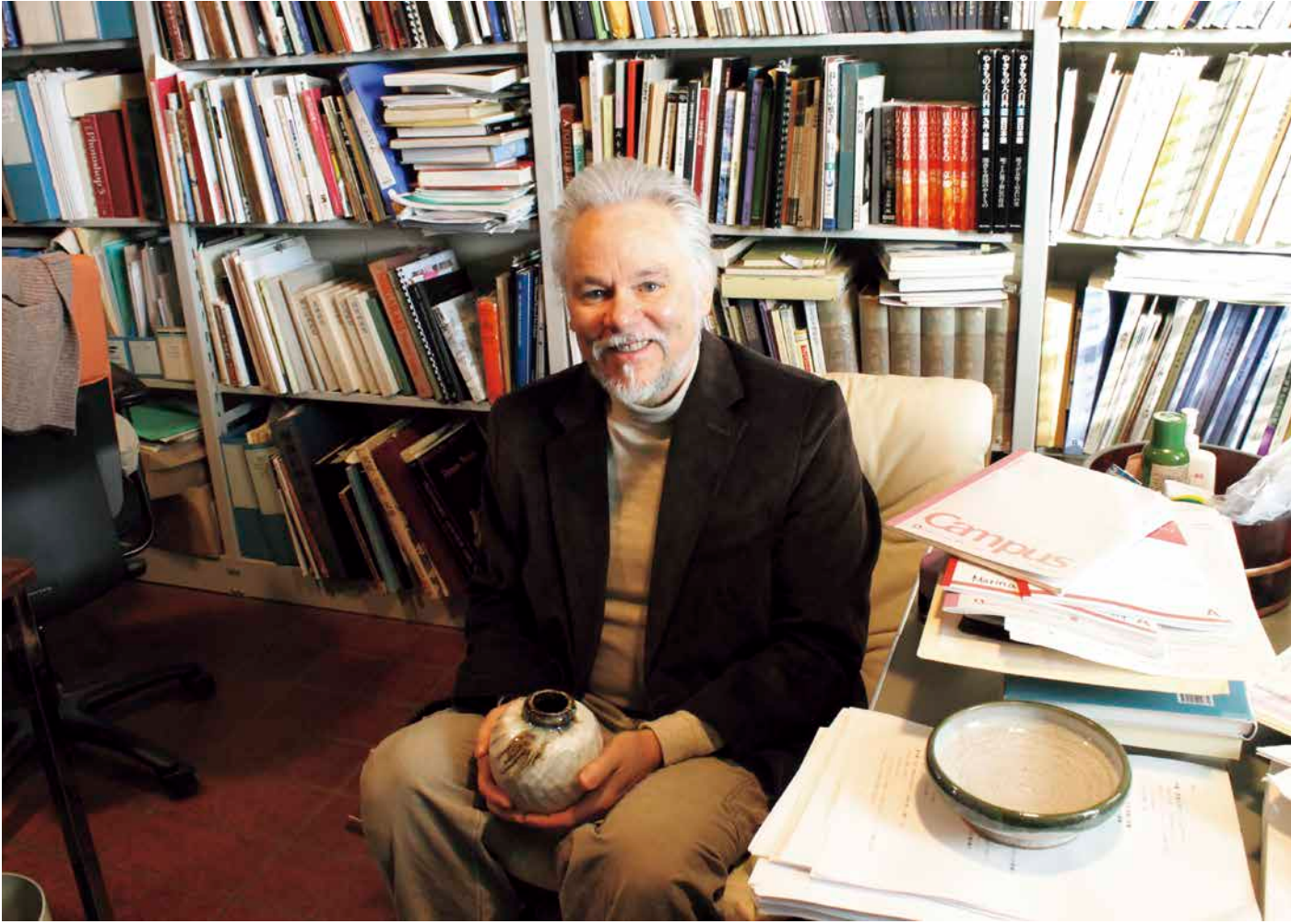
美術・文化財研究メジャーの目指すところは、美術品や文化遺産・出土品などの過去・現代・未来における意義を理解するとともに、モノの本質を見る目・意識を学び、そこからメッセージを受け取って分析できる人材を育成することです。

「美術・文化財メジャー」というくくりを見て、人文科学系の科目である美術と、歴史・社会科学に分類されることの多い文化財研究がセットになっていることを不思議に思う方もいるでしょう。確かに日本では、美術研究においては芸術作品の歴史背景や様式を探る人文科学的アプローチが目立つのに対し、文化財研究は芸術作品の現代の表現と将来の生存に注目する。しかし最近西洋では、美術研究と文化財研究はいずれも、モノの過去・現在・未来における使われ方・捉えられ方・存在意義を問う学問として同じカテゴリーに入るんです。それに倣い、ICUでも美術研究と文化財研究を同じメジャーに含めています。メジャーの学生たちには、研究の対象が何であれ、今を生きる私たちがそれを見てどう感じるかだけでなく、それが過去においてどのような意味を持っていたのか、未来に遺すことにどんな意味があるのか、ということまで考えてほしいのです。

メジャー制が始まった当初は美術・考古学メジャー(Art and Archaeology)としてスタートしましたが、現在は美術・文化財研究メジャー(Art and Cultural Heritage)という名称になりました。名称にとどまらず、新たなクラスの設置や既存カリキュラムの改革などを通じ、このメジャーは変わり続けています。モノの本質やそこに浮かび上がる美意識・人間のあり方をより深く学ぶには何が必要か、教える側の私たちも常に模索しています。

進化するカリキュラム 実践的な授業から得られる理解

美術・文化財研究メジャーでは、より幅広い学びを実現できるよう、カリキュラムの改変を積極的に行ってきました。現在のカリキュラムでは、美術工芸品・建築などの分析を超えた様々なアプローチができるようになっています。



もちろん、西洋・東洋美術史や日本の考古学のクラスを継続しています。しかし加えて、学芸員資格が取れるコースが新設され、文化遺産や文化財の保護・管理の実践的な手法が学べるようになりました。新たに開設された博物館経営論、博物館資料保存論などの授業では、博物館においてモノがどう管理されているのかを知ることができます。また、ICU構内の湯浅八郎記念館で学芸員の指導のもとに展覧会の企画・実施を行うプログラムもあり、学生たちは文化遺産・文化財を扱う現場を体感することで理解を深めます。

そして私が担当している「日本の陶芸：理論と実践」という授業は、学期の前半では講義・レポート・プレゼンといった教室での授業を行い、後半では窯に赴いて伝統的な焼き物を作ってみるというスタイルをとっています。ICU構内の竹でヘラを作る場所から始まり、ろくろで粘土の形を整え、絵入れやうわぐすりを施して窯で焼くという一連の工程を実践することで、器の役割、器にみる美意識、茶道・華道・料理と器の関係などをより深く考察できるようになることが狙いです。この授業を履修したある学生は、歴史的な陶芸のみならず、身近なモノを見る目が授業を通して変わったと語っており、嬉しく思いました。非常に人気の高いクラスなのですが、実習を行うという性質上、1クラス15人が限界なんです。本当はもっと多くの学生にこうした機会を与え、日常生活の中にも美を見出す

東洋的な感覚の奥深さを感じてほしいと思っています。こういったクラスを増やせないか検討しているところです。

もっと本を読んで欲しい

最近の学生は、想像力が豊かで自由なスピリットを持っていると感じます。ですが、15～20年前の学生と比べ、本を読むことが苦手になっているようです。インターネットやSNSの普及が影響しているのかもしれませんが、美術・文化財を研究する上で文献となる本を読むことは欠かせません。どのように学生に本を読むよう動機づけるか、工夫が必要とされています。また、興味のある分野の情報は沢山集めるのに対し、自分の興味とあまり関係なさそうな情報はチェックしないという傾向も強まっている気がします。

今はネット上でハーバードやMIT大学のトップクラスの授業が受けられる時代です。大学という空間に身を置かなくても質の高い講義にアクセスできる時代には、ただ情報を提供するだけでなく、講師と学生が同じ空間を共有しているからこそできる授業のあり方を模索してゆく必要があると感じています。目の前の学生に「What are your learning goals? How can we work together to achieve them?」と問い、インタラクティブな関係を築く中で、学生の知的好奇心を引き出したい。学生の成長を見たいと思ったら、教える側も成長しなければならないと思うんです。

ウィルソン, リチャード L. WILSON, Richard L.

フランクリン・マーシャル大卒。カンザス大修士課程・博士課程修了。カンザス大学スベンサー美術館助手、ミズーリ大学講師、ライス大学助教授、準教授を経て、1993年4月国際基督教大学教養学部準教授として着任。1996年からは教授として、現在まで20年に渡り、教養学部 アーツ・サイエンス学科 美術・文化財研究メジャーを担当。著書に「The Potter's Brush: The Kenzan Style in Japanese Ceramics」、[東アジアの言語・文化・芸術]、[Kamisaka Sekka: Dawn of Modern Japanese Design] などがある。研究テーマは、尾形乾山(その生涯・作品・図像学)、ICU構内における縄文遺跡。

美術・文化財研究メジャーのデータ

主なクラス(2013年現在)
東洋美術概論
西洋美術概論
文化遺産・文化財入門
近代美術Ⅰ・Ⅱ
博物館概論
日本美術Ⅰ・Ⅱ
日本の陶芸：理論と実践
考古学実習
博物館経営論
博物館資料保存論
博物館情報・メディア論
博物館展示論 など

担当教員(2013年度現在)
伊藤 亜紀 ITO, Aki
ワトルズ、ミリアム WATTLES, Miriam
ウィルソン、リチャード L. WILSON, Richard L.

特集 ICU生の強みと弱み

それぞれの大学の卒業生には、特定のカラーがあると言われるときがある。
確かに大学が、その人、その人生に与える影響は決して小さくはないだろう。
だとすれば、ICU生はどのような特徴、傾向を持つのだろうか。
この特集は、ICU生がどう見られているのか、ICU生はどのような強みや弱みを持っているのかを探ってみようというものだ。
これまでの生き方の振り返りでもいい、今後を考える際の参考としてでもいい、なんらかの形で同窓生の役に立つのであれば、幸いである。



日本と世界、両方知ってこそその国際的教養

長くアメリカの大学や東京大学で活躍され、3年前に着任された岩井克人客員教授に、ICUとICU生について伺った。

写真：青地あい(本誌) 取材・文：森川幹人、樺島榮一郎(本誌)

編集部（以下FAN）：まずは先生のご経歴について教えていただけますか？
岩井先生（以下岩井）：子どもの頃は科学少年でした。ファール昆虫記とか、日本野鳥の会の創立者である中西悟堂の本、ビッグバン宇宙論を提唱したジョージ・ガモフの科学啓蒙書などを読んでいました。将来はアインシュタインのような物理学者になりたかったんです。中学生になってからは、空想科学小説を読み始めて文学にも興味をもち、高校時代は小説をたくさん読み

ました。
研究に行き詰まったとき、文学に戻って学問的インスピレーションを受けることもたびたびで、文学をモチーフにエッセイを書いたこともあります。ICUでも「文学や思想を読みなさい」と言っています。科学と文学の両方をやっていたので、どちらにいくか迷いました。悩んだ結果、足して2で割った経済学を選びました。当時はマルクス主義が流行っていて、マルクス主義経済学者の本を読んだら論理的に書かれてい

て、社会科学なら科学と文学の両方をできるのではないかと考えたわけです。
大学に入ってマルクス主義のゼミで勉強し、搾取論や労働価値説にふれました。とても面白かったのですが、「こうある」という実証と「こうあるべきだ」という規範が巧みに混同され、科学ではないと気付きました。当時、マルクス主義を批判していた構造主義にふれた影響もあると思います。結果的に、論理が明確で、実証的である近代経済学を選びました。ただ、近年では、

法学や思想も研究しています。
AN：先生はアメリカの大学で長く教えてこられ、日本でも東京大学を中心に教鞭をとってこられました。外からの目で見ても、ICUについてどう考えていますか？
岩井：着任して3年ほどになりますが、とても居心地がいいです。キャンパスがきれいですね。同僚の先生方がとても親切で、事務も私がこれまでいた大学のなかで一番協力的です。東大をやめるときにいくつかの大学から誘いを受けましたが、ICUに決

※1 おづ やすじろう (1903 - 1963)。中学卒業後、小学校代用教員を経て、1923年、松竹キネマに入社、1927年より監督。サイレント時代から『大学は出たけれど』(1929)、『大人の見る繪本 生れてはみたけれど』(1932)などで評価を受けた。戦時中の従軍を経て、戦後は「小津調」と呼ばれる独特の撮影法、抑えた演出を洗練させ、原節子、笠智衆らを起用した代表作『晩春』(1949)、『東京物語』(1953)など世界的な名作を制作、その他多くの佳作を作った

※2 くろさわ あきら (1910 - 1998)。中学卒業後、画家を志すも1936年P.C.L.映画製作所(後に東宝と合併)に入所。1943年、『姿三四郎』で監督デビュー、戦後、『羅生門』(1950)でヴェネツィア国際映画祭金獅子賞、代表作『七人の侍』(1954)でヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞を受賞、その他、『用心棒』(1961)『椿三十郎』(1962)、『天国と地獄』(1963)など多くの傑作を制作。ルーカスやスピルバーグをはじめとして海外の映画監督にも強い影響を及ぼした

※3 みぞぐち けんじ (1898 - 1956)。小学校卒業後、広告図案などを経て1920年日活入社、23年より監督。サイレント時代から多くの映画を手掛け、トーキーで戦前の代表作『残菊物語』(1939)を制作。戦後は、カットを入れない撮影法、幻想的な時代劇などで独自の世界を完成させ、『西鶴一代女』(1952)でヴェネツィア国際映画祭国際賞、『雨月物語』(1953)、『山椒大夫』(1954)で銀獅子賞。ゴダールやトリュフォーらヌーヴェルヴァーグの監督に強い影響を与えた

めた一つの理由は学生のレベルが高いことでした。ただ、偏差値で選んだのではない、違った意識をもっているのもいいですね。授業中に質問をもう少しするような積極性がほしいと来てから思いましたが、全体的に質は高いです。そして、国際性があること。最後は、最大の強みだと思いますが、教養に力を入れていることです。この3つの理由で選びました。数年前に学科制をなくしてアメリカのリベラルアーツの標準形になったことは、強みになっていくでしょう。現在の日本では教養学部をなくして、専門学部だけにする流れがあります。しかし、それに逆行していることが、本来的な意味でのグローバル化に密接に結びつくと思います。

私はアメリカの大学にもいて、イギリスの大学にも少しいました。MIT、UCバークレー、イェール、プリンストン、ペンシルバニア、LSEなどです。確かに、これらの研究大学は研究に力を入れています。ただ、アメリカの大学の強みは、それ以外にリベラルアーツを中心とした小さな大学があることです。MITの大学院で学んでいたときも、学生は世界中から来ていますが、アメリカからの何割かは小さな教養大学出身でした。学部では専門を極めていないので、最初のうちは特に優れているわけではないのですが、大学院にいる間に急激に伸びて行って世界的に活躍する人をたくさん見てきました。

グローバルな教養とローカルな教養

AN：先生が考える教養について教えていただけますか？

岩井：国際会議に呼ばれることがあります。ジョークなのですが、「日本の学者は発表のときは頑張るが、夜は寝てしまう」と言われます。夜の食事や、食事の後でお酒を飲むときに、学問以外の話がなかなかできないからです。同じ学会に呼ばれても学者の専門はそれぞれ異なることも多いので、世界に通じた思考や芸術について語れることが大切なのです。国際舞台におけるエリートは、「The Economist」や「The New York Review of Books」や「The New Yorker」などを読んでいて、共通の読書、芸術、映画などの体験をもっています。

UCバークレーで助教として在籍していたときのルームメートはスペインのカタルーニャ出身で、応用数学を使った経済学を研究していました。ですが、まさにヨーロッパの教養人と言える人物で、本棚には現代思想や古典の本が並んでいたのを思い出します。彼とは普段から文学や映画のことなどを話していました。

「世界の教養」には日本の文学や映画も入ります。文学の専門家でない人から「小津安二郎(※1)や黒澤明(※2)や溝口健二(※3)を知っているか？」と聞かれた

ことがあります。大学でも学生が主催する映画上映会などが毎週開かれていて、小津や黒澤の映画も含まれていました。

学生にも「教養人になりなさい。そのためには世界の古典映画を観なさい」と言っています。もちろん文学もいいのですが、最近の学生は本を読むのが遅くなっているので、文学だと時間がかかってしまいます。でも、映画なら1時間半や2時間で世界の教養を身につけられる！しかも面白い！世界中の教養人が観ているので、話すことがなくなったら小津や黒澤の話をすればいいんです(笑)。小津も黒澤も世界性をもっています。どちらもトップ10に入るのでしょう。小津は戦争中にシンガポールでハリウッド映画をたくさん観たんです。帰国後、その真似をやめ、徹底的に日本なるものを追求して、逆に、人間という概念を拡張しました。ローカルを極めてグローバルになったのです。黒澤は娯楽に徹したときは、世界の誰が観ても面白いものを作った。だからマカロニウェスタンなどが真似をしたのです。ただ、「芸術的」になろうとした後半は二流になりました。日本を代表するこの二人は、まさに対照的なグローバル化の道を示しています。ICUでも日本の古典映画を観る授業など、もっとやったらいいと思います。

これからの世界で教養人であるためには、二重言語の環境に置かれて、母語と英語、両方の教養をもっていることが重要です。英語については読めることが大切で、それでグローバルな知識を得られます。もう一つは、母語の教養をもっていることが必要でしょう。世界中には英語を第一言語にしている人はたくさんいるので、それだけではあまり意味がありません。むしろ、英語の世界のものとは何か違うものをもっていることが大切です。母語の教養が独自性や価値となり、グローバルな意味で知的に貢献することにつながります。英語を第二言語とする人は、言語で表現することの難しさがわかるので、逆に表現それ自体で創造性をもてるかもしれません。ICUも日本にあるからその教養や、アジアにいることの独自性をもっと大切にしたいと思います。

生き方を探る場として有益な1学部制

AN：最近、他大学でも教養を打ち出すところが増えてきました。今後、ICUの教養は何を目指すべきなのでしょう？

岩井：ICUは教養学部が一つということが特色でしょう。一つの学部のなかにあらゆる分野の先生がいて、教養を学びながら専攻によって専門も学ぶことで、二重性が生まれるのです。人間はなるべく多くの二重性を抱えているほうがいいと思っています。

日本は失われた20年があって、苦しい時代でしたが、実は労働生産性は上がって



岩井克人
IWAI, Katsuto

1947年生まれ。専門は経済理論。東京大学経済学部卒業。マサチューセッツ工科大学Ph.D。イェール大学助教授、東京大学助教授、プリンストン大学客員准教授、ペンシルベニア大学客員教授などを経て、89年より東京大学経済学部教授。2006年4月より東京財団上席研究員。2009年4月ベオグラード大学から名誉博士を受ける。“Disequilibrium Dynamics”で日経・経済図書文化賞特賞、「貨幣論」でサントリー学芸賞受賞。「会社はこれからどうなるのか」で、第二回小林秀雄賞受賞。2010年4月より国際基督教大学客員教授。

いるんです。OECDのなかで高くないのは確かですが、アメリカやヨーロッパと比べてそれほど低くない。結果的に日本の生活水準も平均的には上がっており、大学卒業後すぐに専門を決めず、自分がどう生きていくのか余裕をもって決めることができる時代になりました。大学のときは学問でも仕事でもまだ何が専門になるかわからないことが多いので、オプションをある程度広げておいたほうがいいのです。だから今の時代、教養に力を入れているICUの強みはより生きてくると思います。卒業生も、今からでも遅くないので、小津安二郎と黒澤明の映画をぜひ観てください(笑)。



ウェディング・レセプション承ります

ご予算に合わせ、お料理のご注文に応じます。
同期会・サークルのお集まりなどのケータリングも、
ぜひご相談・お問い合わせください。

東京ケータリング(株) ICU食堂

TEL&FAX 0422-33-3519 携帯 080-3117-3203

e-mail; tok.icu-shokudou@chorus.ocn.ne.jp

それぞれの立場の人に聞く、ICUの強みと弱み

やはり評価とは、外部からなされるもので、立場が違えば見方も違うだろう。
ということで、それぞれの立場の人にICUについて語ってもらいました。

⇒ 企業人事からみたICU

OG訪問で「ICU生の強みは何ですか？」と学生から聞かれると、「よく勉強していること」と回答します。ICUの授業スタイルは、課題を与えられ、仲間と議論し、本やネットで調べ、最終的には意見をまとめて、エッセイを書いたりプレゼンをするというのですが、仕事でもこのプロセスは同じです。誰も解を有していない課題が与えられ、一生懸命調べ、考え、議論し、上司や顧客を説得するべく画策する。特に商社では新規ビジネス・施策の策定が多いため、自ら考えて動くという基本動作を学生時に身に付けられたことは、大きな財産です。

複数の活動を掛け持ち出来る環境が整っているのもICUの良さです。部活を二つ三つ兼務している上に、バイトも掛け持ち、という人が当たり前のようにいますよ

ね。このような掛け持ちが許される環境にある大学は少ないのでは。私自身、複数の活動を掛け持ち、経験を積むことで、社会人としての基礎が形成されたと感じています。一方で、様々な活動を兼務していると、責任感や困難を乗り越える忍耐力は、養われ辛いように思います。様々な団体のリーダーが、「手伝いたいと言う人はたくさんいるのに、実際は何もしてくれない」と嘆いているのを何度も目にしました。忙しいから。少し自分の考えと違うから。そうだった理由で、加入している活動に深く関わらなかった人も多いのではないのでしょうか（私自身も反省する点です）。そんなICU生には、学生の間に「何かをやり遂げる経験」を是非積んで欲しいです。私の場合は寮生活でした。グローバルハウスは当時新設されたばかりで、住人同士の交流が無い、

病院みたいな場所。寮の良さを知っていた私は、ここを最高の場にする！と意気込み、寮の運営組織作りを試み、パーティーを企画し、と頑張りましたが、寮内には違う考え方の住人も多く、毎日のように衝突続き。「なぜ一緒にやってくれないの？」と葛藤するばかりで、本当に辛い日々でした。でも、努力は確実に実を結び、卒業する頃には、ホームと思える場所が出来上がっていました。学んだことも数知れず。違う価値観を受け入れること。でも自分の信念を貫くこと。粘り強く説得すること。忍耐強く待つこと。これらが仕事をする上でどれだけ活きていることでしょうか。本気でぶつかって分かり合った寮の友人は家族のような存在。そして、今、現役寮生たちが楽しそうに寮生活を送っているのを見ると、心から嬉しくなります。



春原頌子 (49 ID05=日野)

すのはら しょうこ (SUNOHARA, Shouko)
2005年6月ICU卒業（国際関係学科、社会学専攻）。2006年4月 三菱商事株式会社入社、化学品グループ配属。2010年7月人事部へ異動、研修チームにて人材育成に携わる。

⇒ 親の立場からみたICU

私たち家族は、米国暮らしが長かった。だから、18歳を過ぎた子供は親から離れて暮らすことが一般的であるアメリカ人家族をたくさん見てきました。純粋な日本育ちの私たち夫婦も、田舎出身のためということで高校卒業後は親元から離れて暮らしていたから、娘にもぜひそうしてほしいというのが夫婦の願いでした。

日本に帰国して、娘が日本の大学に行くことになってICUの環境は最適に見えました。さいわい新寮に入れていただき、3年生のいまはUCLAに1年間、留学しています。入学時、実はもう一つ別な大学に合格していたのですが、その大学には寮はなく、その差が入学を決めた大きな要因になったとも言えるでしょう。

最近、就職活動でも社会人生活でも、寮生活出身者の適応力は高い、という記事を

読むことが多い気がします。一人暮らしより自由度は低いが、友人たちと若者らしく自分を磨きながら共同で生活し勉強する一。そのことで、社会で必要とされる説得する力や、ICUが強調する問題を発見し、解決する力が身につくだろうと、確かに思われるのです。

最近の学生は、大きなグループで行動することが少なく、一人や、気の合った、価値観が同じごく少人数の集団で動くことが多いように聞きます。けれども娘を見ると、あまりそうは感じられません。このような環境を存分に生かし、討論の力や、グローバルな行動力に優れた点が、ICU生の大きな強みと言えるのではないのでしょうか。ただ、新寮は入寮期間が2年しかなく、寮生活のメリットが3年生以降受けられない学生がいることが残念です。

さらに言うと、寝食を共にして学習・研究するメリットは、むろん、入寮生だけにとどまっていいわけでもありません。このことに気がついた慶応大学藤沢キャンパスでは宿泊型教育・研究施設の建設を始めるようです。180人分の宿泊室を設け、学生が泊まり込んで行う授業、海外の研究者が滞在して行う研究プロジェクトなどに使うということですが、広大なキャンパスを持つICUでも、こうした施設の整備を検討されてみてはいかがでしょうか。

就職力とか、コミュニケーション能力などと言った言葉がはやっていますが、目先の力や短兵急な出来あいの力は、その場限りで終わってしまうに違いありません。大学とは、そうした目先の力だけにとらわれるのではなく、ほんとうの独立心とか、人間力とか、人と対話し説得する力などを、学

び、身につけるところのはずで、そのための環境整備を願ってやみません。



森 暢平

もり ようへい (MORI, Youhei)
京都大学卒。毎日新聞を経て、現在、成城大学文芸学部マスコミュニケーション学科准教授。専門はメディア史。

⇒ 高校からみたICU

私はICUを卒業後、他大の大学院に進学し修士課程を修了した後、これまで東京都内の中高一貫校（最初の3校は私立女子校、現在は国立大学附属の男子校にて勤務）で英語科教諭として教鞭を執ってきました。どちらかという中学校の担任を受け持つことが多かったせいか、ICUのみならず大学という教育機関が、例えば中学1年生を受け持って日々格闘している時は、遠く感じられるというのが正直な感想です。

実際にこれまで約17年間中学高校の現場で教職に携わってきたわけですが、私が育てた生徒達は数少ない例外を除いて、残念ながらICUにはご縁がありませんでした。ICUやその他いわゆる難関大学への進学を目指す場合には自ら学ぶ意欲が不可欠ですが、正直に言って私がこれまでに勤務した女子校では生徒達に学ぶことへの気概がそれほど強く感じられない一方で、学校側は手取り足取りの指導と進路実績の向上に躍起になっている、といった奇妙な感覚が常

にありました。

一方で、現在勤務している学校も非常に特殊な環境なので、ICUを第一希望の進学先として掲げている高校生は皆無です。ここ数年は海外の大学へ直接進学する生徒も数名おり、理科系の生徒の割合が学年の半分以上、医学部へ進学する生徒も30名程います。第一志望の大学に進学するために浪人する生徒も多く、ICUの掲げるリベラルアーツの範疇に収まりきらない専門性を求めている生徒が多いように思います。

さて、ここまで書いて我が母校であるICUが非常に遠くに感じられるわけですが、私も母校への愛着が無いわけではありません。高校生の進路指導用に購入していた朝日新聞社発行の「大学ランキング」という本では、ICUは当時、総合1位もしくは学生の満足度1位などとして挙げられていたと記憶しています。そういった母校への評価は喜ぶべきものだと思いますが、3000人規模という少人数教育を誇るICUが進化

し続けるためには、大学の特徴や教育の成果をより一層アピールし、学ぶ意欲に溢れた優秀な学生を多く獲得すること、そして学生達に学問研究、更には人間としての成長の場を常に提供し続けていくことが必要だと思います。

私が中学・高校の英語教師を志したのはICUの英語教育、当時のELPに刺激を受けたことがきっかけでした。高校までは英語は教科の一つに過ぎなかったわけですが、ICUで初めて英語をCommunication toolとして実感することができました。大学1年生で可能ならば、そういった教え方を高校生・中学生にも少しずつ前倒しで実施できないかと考え、現在に至っています。一つ残念なのは、今年が教員免許更新講習の年にあたるのですが、ICUではその講座が開講されていないことです。他にも、例えば高校生対象の講座を設けるなども今後は必要になってくるのではないのでしょうか。ICUでの英語教育の成果を社会に還元していく

こと、更には日本の英語教育を牽引していくことが、今後のICUの使命であると思います。



須田智之 (37 ID93)

すだ ともゆき (SUDA, Tomoyuki)
新潟県長岡市出身。国際基督教大学教養学部語学科卒業、玉川大学大学院文学部英米文学科修士課程修了。テンブル大学ジャパンキャンパス大学院教育学研究科修士課程修了。大妻中野中学・高等学校などを経て、現在、筑波大学附属駒場中学・高等学校にて英語科教諭として勤務。

⇒ 現役生からみた、現在のICU

ICUの強みと弱み。特集テーマについて考えた時、真っ先に思い浮かんだのは“リベラルアーツ”という言葉である。入学当初から聞かされてきた言葉であり、ICUの代名詞と言っても過言ではないほど馴染みの深い言葉である。しかし、改めてその意義を問われた時、多くの学生が返答に戸惑うだろう。いったい、リベラルアーツとは何であるか。呪文のように唱えられてきたこの言葉の実態を探ることで、現在のICUの強みと弱みが見えてきた。

リベラルアーツの最大の特徴は、その“学際的な学び”にある。一般に学際的とは、異なる専門分野の垣根を越えて学ぶことを言う。では、ICUにおける学際的な学びとは、いかなるものであるか。現役生である筆者の経験に基づいて説明したい。

先学期、私は社会心理学という授業を履修した。別段心理学に興味があったわけではなく、時間割の都合上選んだ科目である。しかし、学期を終えてみると、最も印象深

い授業であったと思う。特に、進化論の視点から人間の心理を解明する試みは新鮮であった。また、自然淘汰という新たな視点をもって周りの世界を見るようになり、人間という存在に対する見方が変化した。少し話が逸れたが、要するに、自分の興味の幅を越えて広く学ぶと、予期しなかった結果を得られることがある。

“学際的に学ぶ”ことの意義は、ここにあると思う。すなわち、方向づけられていない学びのなかで、本人も自覚していない新たな視点を発見すること。そして、新たな視点を持つことで、世界の見方が変化する。学際的であるがゆえに、様々な切り口から世界を見ることができるのである。学年を重ねるにつれ新たな発見を繰り返し、豊かな学びが実りゆくその可能性こそ、リベラルアーツ・カレッジであるICUの強みである。

しかしその一方で、リベラルアーツは危ういものであることも指摘したい。現在

ICUには、“メジャー難民”という言葉がある。三年次になってメジャーを決められない学生のことを指す言葉らしい。その主な原因は、学びたいことがはっきりしていないことにある。今まで興味のある授業を取ってきたが、結局自分は何を学びたいのか分からない、という学生が陥る状況である。ここに、リベラルアーツの危うさがある。面白そうな科目を闇雲に取り、“興味をつまみ食い”に終始している限り、リベラルアーツの真の価値は現れない。むしろメジャー難民のように、いたずらに混乱を招くだけであり、結果として専門性の低さだけが露わになる。そうした意味で、リベラルアーツの弱みは“専門性の低さ”にある。

真のリベラルアーツとは、学んだことを主体的に関連づけ、独自の“興味”を創り出すことにあると思う。つまり、学際的な学びによって得られた視点を、自らの座標軸において意味づけする。そうして生まれ

る学びのoriginalityこそ、リベラルアーツの真髄であり、ICUの強みであると私は考える。



日下部洋亮 (本誌)
くさかべ ようすけ (KUSAKABE, Yosuke)
国際基督教大学教養学部2年。人類学と教育学で迷った挙句、教育学メジャーに。前号のスポーツ特集から、ANに参加している。

⇒ 自由の大学、人生の冒険を後押しする学校 (まとめの話)

スペースの都合上、僭越ながら、まとめ的な話を書いてみることにする。

大学は、人生の刻印である。大学院や職場で他大学に身を置いて、そしてこのANで多くのICU生を知るにつれ、いつしか、そんな言葉が浮かんできた。間違いなく、最初に入學した大学は、その人のあり様に、消すことのできない影響を及ぼし、個性の一部にすらなりうるものだ。ICU出身者の特徴の一つとして挙げられるのは、その多様性である。金融、商社、メーカー、会社経営といった実業界はもちろんのこと、NPO、行政機関、新聞やテレビなどのメディア、教師、牧師、医師、政治家、ピアニスト、林業、農業、木工職人、陶芸家、画家、ダンサー、落語興行師、小説家、宇宙飛行士、整体、鍼灸など、その多様性には本当にいつも驚かされるし、新たな職業を創り出してしまった人も存在する。

その背景には、在学中に味わう自由があるだろう。この自由は、ICUの様々な要因により形成されてきた。第一に、それまで当たり前だと思っていたような既存の常識や価値が相対化されることがある。これは、学部や専攻に囲い込まれることなく、さまざまな分野の授業に触れること、他の分野

の学生や先生と話をする機会があることなどによるだろう。第二に、個性を大切にするという面がある。湯浅八郎学長がよく「一つあって二つとない」と言って自分自身の個性を大事にするように言っていたと、初期の卒業生に聞き、ICUの校風は、創立直後にはできていたのだなあ、と驚いたことがある。キリスト教に基づく寛容さも、物理・精神の両面で、あらゆる人を受け入れるという雰囲気繋がっているだろう。また、この第一、第二の要因は、アメリカ人を中心とする各国の留学生、教員の存在により、作られた部分も大きいだろう。筆者は在寮中に、アメリカ人留学生などの、自分が必要と考えなければ行事などに参加しないとの方や行動、それを主張することが驚きだったが、それにより、日本的な集団のあり方に気付かされたという面が確かにある。

第三に、広く、自由なキャンパスの空間がある。特に本館前の芝生の広場の自由な使われ方や交流のあり方はICUそのものと言っていいだろう。他大に行くと、建物と道の用途が決まった空間で構成され、芝生があっても立ち入り禁止だったり、空間が小さすぎて人が滞留しないところを見かけ

る。ICUのおおらかな空間は日本ではまれなのだ。第四に、官僚、実業家などの特定の職業に就くことや、一人の創立者の理念の実現を目的に設立された大学とは異なり、ICUは具体的な目的のために設立されたのではないことが挙げられよう。最後に、自由に生きる先輩を見て、憧れる、知らず知らずのうちに、好きなことをやっていいんだと思わされること、そういう環境・伝統もあるだろう。

しかしながら、自由は、能力ある者の特権であるとも思うのである。新しいこと、人が行わないことを行う際には、当然、さまざまな摩擦、労力が伴う。また、不確実性が高く、予想は困難である。そういった点で自由はリスクではあり、それを乗り越える能力が無ければ、多数の人がとる行動の結果よりも、その人の状況は悪くなるのかも知れない(そういうことを全く意識させない優秀な人がICUには多いが)。また、今ある価値に囚われない視野の広さ、価値の相対化が、所属する組織へのコミットを弱める場合もあるかもしれない。しかし、だからこそ、それまでになかった価値を社会にもたらすという点において、ICU生が強く生き抜き、輝くことが、特に日本社会への

貢献となるとも思うのである。また、今後の変化の速い世界では、個人的にも社会的にも、自由と多様な価値観を使いこなすことが、さらに重要になろうが、この点でICU生は先駆的な存在なのかも知れない。ICU生がさらに活躍する場面が増えること、その活躍がさまざまな面で社会への貢献となることを個人的には確信しているのである。



樺島栄一郎 (本誌)
かばしま えいいちろう (KABASHIMA, Eiichiro)
ICUの魔法が効きすぎたせいか、卒業後、(社会的に)流浪の20代を送る。31歳で大学院に行き直し、現在、相模女子大学専任講師。専門はメディア産業論。

同窓生への新サービス開始！！

お部屋探し支援。

(株)ICUサービスは、ICUの100%出資による事業子会社です。

ICUサービス提携不動産業者では、同窓生の方にも、紹介手数料割引等、ICU特典が使えるようになりました。是非ご利用下さい。

注) ICUサービス提携不動産業者の指定店舗 (ICUサービスのWebに掲載) での取り扱い物件 (主に首都圏・業者により扱いは異なります) に限ります。 また、同窓生であることの確認が必要です。初回来店時に、「ICUサービスの紹介」であることを伝えて下さい。

その他、お子様のためにICUキャンパスでのサマーキャンプ (生涯教育事業) や、Goodsの販売支援、学内結婚式のサポート等、幅広く同窓生にサービスを展開中。

そうだ!! **ICUサービス** へ行こう！

本部棟 (Admi-Bldg) 2F 続きはWebで→ **ICUサービス** で検索

Mon-Fri 9:00-12:00, 13:00-17:00
TEL:0422-33-3530 Mail:info@icu-service.com

翻訳・通訳

みなさまのおかげで、創業25年・・・
これまでICUの同窓生を通じて
お手伝いさせていただいた企業・団体は200社以上。
心よりお礼申し上げます。
今後ともご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。

翻訳・通訳・制作 (デザイン・印刷) のエクシム・・・

●2014年春から「ビジネス翻訳者養成プログラム」開始予定

同窓生10%割引

日本外国特派員協会会員 / 東京商業会議所会員

(株)エクシム・インターナショナル
EXIM INTERNATIONAL, INC.

TEL 03-3431-2118 FAX 03-3431-2120
E-mail : tokyo@exim-int.com

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 ゼネラルビル3F
東京事務所

〒232-0063 横浜市区南中里2-14-5
TEL 045-721-4800 FAX 045-721-5165
E-mail : yokohama@exim-int.com
横浜事務所

President 永島 克彦 (14期) Advisor 比奈地 康晴 (14期)

今年は日曜の午後に開催

3月30日
SUN.

総会・DAY表彰式 14:30 ~
懇親会 16:50 ~

桜祭りのご案内

文：斎藤三穂（総務部担当副会長）（20 ID76）

春色にわかに動きはじめ、心踊る季節となりました。そして、同窓会は桜が迎えてくれることを願いつつ、恒例の同窓会「桜祭り」を催します。

昨年は台風が多く、この稿を書いている時点では伊豆大島やフィリピンに甚大な被害があり、心痛みます。そして、2011年の大震災から3年を経ても、その復興の道のりはまだ遠いです。全ての人々が、一日も早く私達と同じように心安らかに桜を愛でられるようにと祈ります。

同窓会桜祭りは、同窓会総会、DAY授賞式、卒業50周年記念式典、懇親会など、さまざまな企画を統合した総合イベントです。そして、毎年卒業50周年を記念し、今年は8期生の方々をお招きします。

今年の開催日時は3月30日の午後です。例年は、3月の最終土曜日午前中の開催ですが、今年は大学の他行事との日程調整の結果、最終日曜日午後となりました。どうか、くれぐれもお間違いのないようにご注意ください。

できるだけ多くの方々が、この機会に大学に足をお運びになり、懐かしい方々との旧交を温めてくださいますように。ぜひ、お知り合いの同窓生にお声かけの上、ご参加をお願い申し上げます。

当日は、新作のICUワインや日本酒「ばか山」をはじめ、同窓会事業部の企画によるICUグッズも多数ご用意しております。実際にお手に取って、私達の渾身の作品を吟味ください。

また、当日の様子はインターネットによるストリーミング配信でご覧いただける予定です。詳細は同窓会ホームページ等でお知らせします。

【2014年 ICU桜祭り】

開催日：2014年3月30日（日）

場所：ICUキャンパス内

● 総会・DAY賞表彰式・8期生の卒業50周年記念式典

14:00開場 14:30開始

大学礼拝堂にて

16:30 プログラム終了予定

終了後、DAY賞受賞者と8期卒業生の記念撮影

● 懇親会

16:50 ~ 18:00 (予定)

ダイアログハウス内 大学食堂にて

参加費：4000円 (卒業生)、1000円 (在学生)

☆2013年夏・2014年春卒業の皆様は「無料招待」となります。

お申し込み、お問い合わせ

各プログラムへのお申し込みお問い合わせは、ICU同窓会事務局で承ります。

◆ ICU同窓会事務局

住所：〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2 ICUアラムナイハウス2F

TEL/FAX：0422-33-3320 e-mail：aaoffice@icualumni.com

＜卒業生の皆様へのお願い＞

総会・懇親会出欠のご連絡を、以下いずれかの方法で2014年3月16日(日)までに、お願いします。

● インターネット送信

(詳細は、同窓会ホームページ<http://www.icualumni.com/> をご参照ください。)

● 本号に同封の返信はがき (3月16日 消印有効)

● 電子メール aaoffice@icualumni.com

● ファックス 0422-33-3320

※ 8期生の皆様へ

1月に別途郵送済みのご招待状に同封のはがきをご利用ください。

DY (Distinguished Alumni of the Year) 賞は、ICUに在籍したことのある人 (卒業生・留学生・旧職員を含む) の中から、大学および同窓会の知名度・魅力を高めることに貢献した方に対し、毎年10人程度を限度として、その功績を称えるために授与されるものです。

また、毎年「Happy 10's」と称して、卒業してから10年、20年、30年、40年の節目を迎える同窓生の方々に、同窓会より記念品をプレゼントしております。18期 (74年卒)、28期 (ID84)、38期 (ID94)、48期 (ID04)の皆様、おめでとうございます。同期の方々とお誘いあわせのうえ、ぜひご来場ください。

同窓会正会員の方で、総会資料を事前に入手されたい方には、同窓会事務局から、ご登録の送付先ご住所に郵送いたします。

電話・ファックス：0422-33-3320または電子メール：aaoffice@icualumni.comにご請求ください。

今年は写真café! ICU祭での同窓会の活動

美しい写真日和となったICU祭
さまざまな企画も盛りだくさん
多くの同窓生が集いました

文：樺島榮一郎（本誌）、写真：樺島榮一郎、堀龍太（48 ID04）、吉田繁美（24 ID80）

2013年も11月2日（土）、3日（日）にICU祭が開催され、両日ともに美しい秋の晴天のもと、多くの人々が来場した。同窓会は、例年通り、アラムナイハウスと本館前テントで活動を行った他、新企画として「卒業生による“アカデミックトーク”」を本館116教室で行った。アラムナイハウスの2階ラウンジは、堀龍太理事（48 ID04）が中心となり企画・運営を行った「写真café」。「ICUの魅力再発見」をテーマに、事前に募集した写真のうち、特に優れた9点を掲示し、写真コンテストとして来場者による投票を行った。投票用紙には、「入学当初、よくバカ山で友人と同じ様にはしゃいでいたのを思い出します。」「雪景色。その昔、全学ストの時も雪が降ったっけ…。」などのコメントが見られ、美しい写真を見ながら、在学時のことを思い出した同窓生が多かったようだ。Caféのメニューは、山際百合子さん（45 ID01）が銀座で経営するアートカフェ「ART FOR THOUGHT」によるケータリング。カリフォルニアロール（アボガドを具にした手巻き寿司）などおしゃれなメニューで人気を博した。また、Cadotの竹内さんによる、リニューアルされたICUワイン、日本酒「バカ山」も販売されたほか、同窓会事業部の石川美奈さん（30 ID86）らにより同窓会グッズの販売も行われた。本館前テン

トでは、毎年好評の佃隆さん（44 ID00）によるカイロプラクティック体験施術・健康教室や、富岡徹郎事業部担当副会長（26 ID82）らによるストラックアウト、バスケットビンゴといった子ども縁日を開催、今年も行列ができるほどの人気を博した。

2日に本館で行われた「卒業生による“アカデミックトーク”」は、朝日新聞の国際業務担当部長にして同窓会理事の池田伸壹さん（32 ID88）の発案で、同期で在学中からの友人の平川秀幸さん（大阪大学准教授、科学技術社会論）と山岡龍一さん（放送大学教授、政治理論、政治思想史）の3人で、関心が重なる「政治」「社会」「市民」「哲学」「思想」などについて語ろうというもの。在学中にD館やバカ山で行っていたという「ダベリ」を25年ぶりに再現するという狙い通り、時には掛け合いや笑いも交えて、平川さんと山岡さんが現在の研究および在学中から現在までの歩みをレクチャーした後に、質疑応答を行った。アカデミックな部分の話がとても面白く、懐かしの本館116教室の空間と50人程度と参加者が程良い数であったこともあって、在学時に面白い授業を受けているかのような感覚があった。

年々、発展しているICU祭での同窓会の活動。次回はぜひ、家族連れで出かけてみてはどうだろうか。



【写真コンテスト大賞受賞作】

撮影：荒井由佳里さん（ID14）

まず、このような素晴らしい賞をいただけたことに感謝いたします。そして、他の素敵な作品と一緒に、ICUの新しい魅力を伝えることができたことを、とても嬉しく思います。春の桜並木だけではなく、この大学は1年を通して魅力が溢れていることを、多くの方に知っていただければと願っています。



ラウンジ入り口に置かれたメニュー見本



ラウンジでは、あちこちで久々の再会を喜ぶ、歓談が見られた

展示された美しい写真に、多くの人が足を止めた



アカデミックトーク、平川さんのレクチャー



ICU祭の味を銀座のアートスペースで!

ART FOR THOUGHT は2011年に山際さんがオープン。「アートをより日常に」をコンセプトにギャラリー内にカフェを併設し、アートを鑑賞しつつ、料理も楽しめるお店だ。歌や演奏、建築めぐりなどのイベントも随時開かれる。ICU生も何人か訪れるとのことで、アートのみならず、さまざまな出会いが期待できそうだ。



ART FOR THOUGHT

東京都中央区銀座8-10-4
和孝銀座8丁目ビル1F
営業時間：11:00-24:00
（日曜・祝日休み）
Tel/Fax：03-6228-5922
<http://artforthought.jp/>

ドリコン2013、金賞はICUヒーロー研究会!

同窓会が、学生の夢を応援します——今年で9回目となるドリコン2013。
総額100万円+同窓会の知恵と人脈を巡って、熱いプレゼン大会が繰り広げられた。

文：岡田庄生（学生担当副会長）(47 ID03)



ヒーロー研究会のプレゼンで使われた写真

2013年9月14日（土）、ICU同窓会主催の「ドリコン2013」決勝プレゼンテーションがアラムナイハウスで行われ、「ICUのヒーローから地域のヒーローへ」を企画した「ICUヒーロー研究会（JAC）」が金賞を受賞した。同研究会は、ICU祭などの学内行事だけでなく、三鷹市警察やPTAなどと協同イベントを行うなど、既に地域貢献活動の実績は十分。さらには、ICUの理念「愛と平和と世界人権宣言」を広めるという理念や、独自のキャラクター「機動礼拝シーベリー」始め、物語設定の緻密さに、満場一致の金賞だった。今後、賞金を活用

して、壊れかけてきた衣装を一新し、さらなる地域貢献活動を通じてICUの知名度を高めることを期待している。

その他、銀賞、銅賞を受賞した団体の企画は、学生ならではの視点で地域におけるICUの魅力を高めたり、海外で得たものをICUに持ち帰ろうとする意欲的な挑戦ばかりで、同窓生一同深く感銘を受けた。同窓会としては、受賞した学生の皆さんに対して、資金面だけでなく、同窓会ならではの人の脈や経験を提供して、今後の夢の実現に向けて引き続きサポートしていきたい。

■金賞（賞金20万円）
・ICUヒーロー研究会 JAC
（企画概要：ICUのヒーローから、地域のヒーローへ）

■銀賞（賞金20万円）
・ワンダーフォーゲル部
（企画概要：創部50年企画 海外山行&環境学習@カナダ）

■銀賞（賞金20万円）+ JICUF賞（賞金2,000ドル）
・ICU Brothers and Sisters
（企画概要：UCアーバイン校のピア・アドヴァイジング団体との交流）

■銀賞（賞金20万円）
・ICU WIND BRASS ENSEMBLE
（企画概要：三鷹吹奏楽ジョイントコンサート）

■銅賞（賞金10万円）
・ICU Debating Society
（企画概要：国内唯一の国際大会ICU Tournament）

■銅賞（賞金10万円）
・<ごめん>で済んだら警察いらない
（企画概要：国際基督教大学学生の自転車マナー向上を目指す有志団体）

なお、当日は、昨年に引き続き、インターネットでのライブ配信（ストリーミング）を行った。学生のプレゼンテーションの様子の動画は下記URLにアーカイブで残っているので、閲覧することが可能。
<http://www.ustream.tv/channel/ICU-alumni>

ICUとヨーロッパの同窓生をつないだ若者の帰還 ～チャリバカ学生、欧州自転車の旅～

またこの日は、昨年のドリコン銀賞とJICUF賞を同時受賞した、松下哲夫さん（ID 14）が、自身の夢であった欧州自転車旅行の様子と、旅先で出会った同窓生との会話を通じて得たものを、学生に向けて報告した。

松下さんは、ドリコンで得た資金を元に、夏休みを利用してスペインに渡り、そこからキャンプ場を転々としながら、モナコ、イタリア、スイス、パリを経由して、最終目的地であるロンドンに到達した。木越純・同窓会副会長の協力を得て、行く先々で同窓生に歓

迎され、食事会を開いてもらった松下さん。現地では大先輩たちのICU時代やその後の物語、現地での活躍ぶりについて話を聞き、とても感銘を受けたと語っていた。「先輩たちの話を聞く事で、人生でチャレンジすることの大事さを痛感した。こんな僕ですら自転車でヨーロッパを横断するという夢が実現できたのだから、みなさんもぜひ自分の夢に挑戦して欲しい」と学生達の前で宣言する松下さんの話に、参加した学生達が聞き入っていたのが印象的だった。



松下さんが行った、欧州自転車の旅の報告。写真が多く楽しいプレゼンとなっていた

A_Goods

グッズ紹介 文：佐々木淳子（本誌） 写真：一之瀬ちひろ（本誌）



バカ山Tシャツ、本館Tシャツ完成!!

ICU名物の「バカ山」と我らが学び舎「本館」がデザインされた Tシャツが出来上がりました!

バカ山Tシャツ・本館Tシャツをデザインしたのは、ブランディングデザインを主に手がける南部隆一さんと本誌のアートディレクターを務める佐野久美子さん。

今回は、統一感を持たせたグッズを展開することで、これまで以上に効果的に大学の魅力をアピールする狙いで、マップを身に付けてICU巡りをして楽しんでもらいたい＝ICUオリエンテーリング、というコンセプトを設定した。

雑誌やウェブ等で活躍しているイラストレーターの竹田嘉文さんに、実際にキャンパスに足を運んでもらい、本館とバカ山を描いてもらった。

シリーズはまだ始まったばかり

卒業生だけでなく、現役学生、留学生、一般の方もターゲットに、より多くの方に日常において着たいと思ってもらえるようなもの、普段の生活でコミュニケーションのきっかけになりうるものを目指し、今後、ICUの動植物、出土した土器、先生方のポートレートなど、様々な魅力を発掘しながら、Tシャツだけでなく、面白散策マップやトートバッグなども含めて、このシリーズを増やしていく予定とのこと。

手にした方がグッズを楽しむことにより、ICUの魅力が広範囲に伝わっていくことが期待される。

SANO, Kumiko (44 ID00)

さのくみこ／2000年ICU人文科学科美術史専攻卒。7年間のデザイン会社勤務を経て、'07年よりフリーランスのデザイナーとして、雑誌や書籍のデザインなどを手がけている。

NAMBU, Ryuichi (46 ID02)

なんぷりゅういち／2002年ICU社会科学科文化人類学専攻卒。ロンドン大学ゴールドスミスカレッジにてMAを取得。デザイン事務所勤務を経て、株式会社ACTANTを設立。同時に2012年東京大学大学院学際情報学府にて修士課程修了。
<http://www.actant.jp>

TAKEDA, Yoshihumi

ただよしふみ／82年生。名古屋出身。東京在住。デザイン事務所でもーショングラフィックデザイナーとして勤務後'10年よりフリー。イラストレーターとしての活動を開始。
<http://www.taah.net>



■サイズ展開
女性用：GM（ガールズM）／男性用：S、M、L、XL
■販売価格：1,500円
【ご購入はこちらまで】
①学内アラムナイハウス2階 同窓会事務局
〒181-8585 三鷹市大沢3-10-2 TEL:0422-33-3320
メールアドレス aaoffice@icualumni.com
②学内新D館2階 三省堂書店にて販売中
※①のアラムナイハウス2階同窓会事務局では、ご指定のご住所まで発送も承っておりますので、ご希望の方は上記までTELまたはメールで、商品名、個数、色、サイズ、送付先等をご連絡下さい。合計金額（送料含む）・振込口座番号をお知らせしますので、入金確認次第、発送させていただきます。

From the University President's Message

大学のページ

2012年度、ICUの取り組みが文部科学省

「グローバル人材育成推進事業」に採択されました。

それから約1年が経過した現在、本プロジェクトがどのように進捗しているのか、日比谷潤子学長よりご説明します。

In 2012, ICU was selected by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) for its “Project for the Promotion of Global Human Resources.”

Now, one year into the project, President Hibiya explains how it is progressing.

文部科学省「グローバル人材育成推進事業タイプA」に採択された、ICUの取り組み

1983年に「留学生受入れ10万人計画」を打ち出した文部科学省は、2008年に2020年を目処に留学生受入30万人を目指す新たな計画「留学生30万人計画」を策定し、「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(旧国際化拠点整備事業(グローバル30))」、「大学の世界展開力強化事業」などを進めてきました。一方、近年、日本から海外に留学する若者が減少している現状を踏まえ、送り出しも推進する必要があるとして、公募された事業が「グローバル人材育成推進事業」(2012-2016年度。タイプA(全学推進型)11校、タイプB(特色型)31校)です。

本学は献学以来、キリスト教の精神にもとづき、国際的社会人としての教養をもって、神と人ともに奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資することを目的としてきました。今回「グローバル人材育成推進事業」に採択された取り組みでは、この目的をさらに高いレベルで実現するため、「英語運用能力のさらなる伸長」「英語開講専門科目履修を通じた情報発信能力(ライティング)の涵養」「教育目的達成の具体的検証としての単位取得を伴う海外留学」を3つの柱に据えています。

グローバル人材育成推進事業：http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/

「英語運用能力のさらなる伸長」

4月入学生全員が1・2年次に履修する、「リベラルアーツ英語プログラム」(ELA：English for Liberal Arts Program)では、2012年度よりELA修了者全員に”IELTS(International English Language Testing System)”の受験を課すこととしました。IELTSは、イギリス発祥の英語テストで、Reading・Listening・Writing・Speakingの4技能をバランスよく測ることができ、ライティング試験が優れているのが特徴です。これまでは主に、イギリス、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランドの大学に留学する学生の英語能力の判定に用いられるテストでしたが、近年はアメリカ、カナダの大学での利用も増えています。IELTSの受験により、学生が自身の英語力の達成度を確認できるだけでなく、海外留学プログラムへの動機づけを高めることが

狙いです。学生には、諸外国の大学が留学時に求める英語力のレベルである「IELTS総合点6.5」を獲得して欲しいと考えています。

「英語開講専門科目履修を通じた情報発信能力(ライティング)の涵養」

専門科目を学びながら、その分野の論文を英語で書く手法を身につけるために、英語開講の授業に「W(Writing)コース」を開設しました。本学では、卒業論文を英語で執筆することを強く推奨しています。この目標を達成するためには、ELA修了時から4年次の卒業論文作成に至る間に、英語による論文執筆の機会を作り、書く力を養う必要があります。ELAのコースの一つであるリサーチライティングで英語による論文作成法を学んだ後、メジャー(専修分野)の履修を深める3年次で、英語開講の専門科目を積極的にとり、専修分野独自の書き方を身につけておかないと、英語で卒論を執筆するのは困難です。そのため、この「Wコース」では、通常の科目よりもレポートなどの課題(writing assignments)を多く課す一方で、教員に加えて、ライティングの指導を補助する大学院生のチューターを配置しています。チューターは毎回授業に参加し、教員と連携を取りながら学生の論文作成過程を支援します。

2013年度は、M.ウィリアム、スティー爾献学60周年記念教授の歴史メジャー科目「近代日本とICU」(春学期)、生駒夏美上級准教授の文学メジャー科目「現代日本文学入門」(秋学期)、森島泰則上級准教授の心理学メジャー科目「認知心理学」(冬学期)を「Wコース」として指定しました。このうち「現代日本文学入門」では、学期の中間および期末に文学作品の批評をレポートとして課し、レポート提出前にはチューターによるライティング支援を受けることを全履修生に求めました。生駒上級准教授は、「Wコース」に関して、「チューターが毎回授業に参加し、ディスカッションにも加わることで、履修生に新たな視点を与えることができた。さらに、チューターの支援による効果もあり、中間と期末の短い期間で、ライティング力を向上させた学生が多かった」と述べており、「Wコース」の効果が実感されています。



ICU Project Selected by MEXT to “Promote Global Human Resources”

In 1983, MEXT established the goal of attracting to Japanese universities 100,000 students from abroad. This was followed in 2008 by a revised goal of 300,000 by the year 2020 and the promotion of other projects with such aims as building international university networks and strengthening Japanese universities’ international activities. Conversely, with a shrinking number of young Japanese people studying overseas, MEXT has recently recognized the need to promote overseas study among Japanese students and thus established the “Project for the Promotion of Global Human Resources.”

ICU’s aim has always been to cultivate superlative internationally-minded members of society who can serve God and humankind and contribute to lasting peace. The project at ICU, which MEXT chose to support as part of its current initiative, seeks to realize that aim and has three central tenants: furthering students’ English skills; developing their writing skills through courses taught in English; and having students take courses for credit overseas as a way to demonstrate the level of English proficiency they have achieved.

MEXT’s “Project for the Promotion of Global Human Resources”：http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/

Further Expansion of English Proficiency

All students who enter ICU in April must complete the English for Liberal Arts Program in their first and second years. Since 2012, ICU has required all students to take the International English Language Testing System (IELTS) test at the end of the ELA Program. IELTS originated in England and is recognized as being a balanced measure of reading, listening, writing, and speaking. It has been widely used to gauge the abilities of non-English

speakers seeking to study in England, Ireland, Australia, and New Zealand, but is increasingly popular in Canada and the US (an overall score of 6.5 is desired for study at many universities). The test allows ICU students to see how far their English has progressed and will help motivate them to study overseas.

Cultivation of the Ability to Convey Information in Writing through Courses Held in English

ICU has designated a number of its specialized courses as “W-Course.” These courses are taught in English and require students to write academic papers in English. ICU strongly recommends that students write their senior theses in English, therefore they need to have opportunities to learn English academic writing skills after they finish the ELA Program and before they start their senior thesis. More than other courses, “W-Course ask students to complete a greater number of writing assignments. In addition to their instructors, courses also have writing tutors who are also ICU graduate students. The tutors attend all classes and work together with the instructors to help guide students through the academic writing process.

In 2013, there were three courses designated as W-Course: “ICU and Modern Japan” in the History Major with Professor M. William Steele (a 60th Anniversary Professor); “Modern Japanese Literature in English Translation” in the Literature Major with Professor Natsumi Ikoma; and “Cognitive Psychology” in the Psychology Major with Professor Yasunori Morishima. In “Modern Japanese Literature,” students had to write midterm and final papers critiquing a work of literature and before submitting each paper they were required to get help from the writing tutors. Professor Ikoma said, “The tutors attend all classes and join discussions so they were able to help students get a different perspective. Even though the midterm and final papers took place over a short period of time, the tutors helped many of the students to develop stronger writing skills.”

「教育目的達成の具体的検証としての単位取得を伴う海外留学

2014年度の交換留学派遣の募集には、過去最高となる約180名の応募があり、ICU生の留学意欲はさわめて旺盛です。しかし、中には経済的理由や就職活動を考えて1年間の留学を躊躇する学生もいましたし、留学先も英語圏に偏っていました。そこで、夏休みを利用した短期留学で単位を取得できるものや、成長著しいアジア諸国への留学プログラムなど、留学プログラムの期間・地域の多様化を進めています。具体的には、今年度より韓国の高麗大学校および延世大学校で実施される6週間のサマープログラムに学生を派遣する「韓国サマープログラム」を開始し、延世大学校に5名、高麗大学校に10名の総勢15名が参加しました。

また、一般的に理系の学生は、カリキュラムが積み上げ型であるため、交換留学に参加しづらいという課題があります。これを解消するために、良質な教育と理系への注力でその名を知られている米国のリベラルアーツカレッジ、ウースター大学（The

College of Wooster、オハイオ州）との連携を推進しています。2013年1月には、ウースター大学から教員3名が来学、さらに11月末には本学から教員3名・学生3名が同大学を訪れ、教育・研究の連携に関する協議や授業に参加しました。

さらに、海外大学で取得した単位の編入上限を、30単位から40単位にまで引き上げました。

「今後の更なる取り組み」

まず、「Wコース」については、多分野への展開を考えており、2014年からはこれまでの科目に加え、新たなメジャーの科目にも「Wコース」を広げる予定です。また、海外留学プログラムの多様化では、ドイツのベルリン自由大学と香港中文大学崇基学院でのサマープログラムを開始します。さらに、2014年の秋には本学で、リベラルアーツ英語プログラム、Wコース、理系学生の海外留学の促進を含めた海外留学プログラムの多様化など、ICUのグローバル人材育成の取り組みに関するイベントを開催する予定となっています。

Credit-Bearing Study Abroad Programs as Verification of Educational Objectives

ICU students are showing a strong desire to study overseas: nearly 180 students applied to join study abroad programs in 2014, more than any previous year. At the same time, some applicants are undecided about whether to join the programs because of financial pressures or because of a concern about post-graduate job hunting. Most students are also applying to study at schools in English-speaking countries. ICU is working to diversify where and when students can study abroad by adding more summer programs and more programs in Asia. For example, fifteen ICU students joined the new “Korea Summer Programs” started in 2013 at Korea University and Yonsei University.

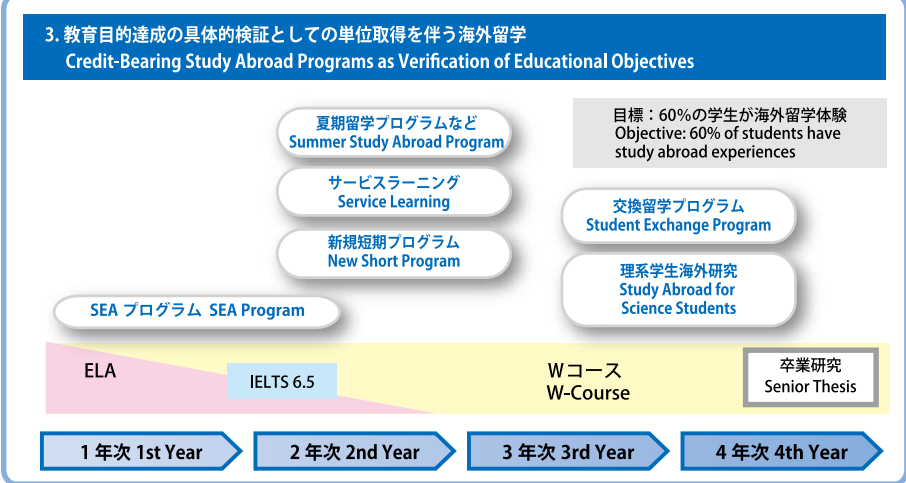
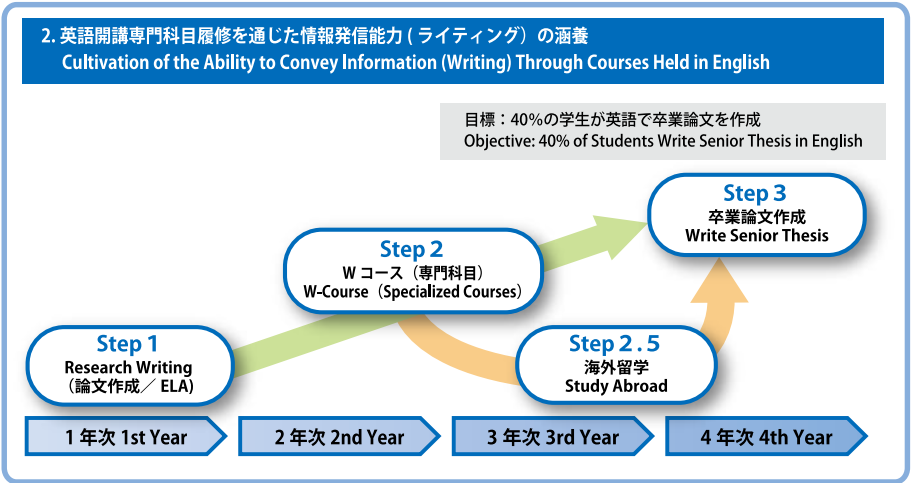
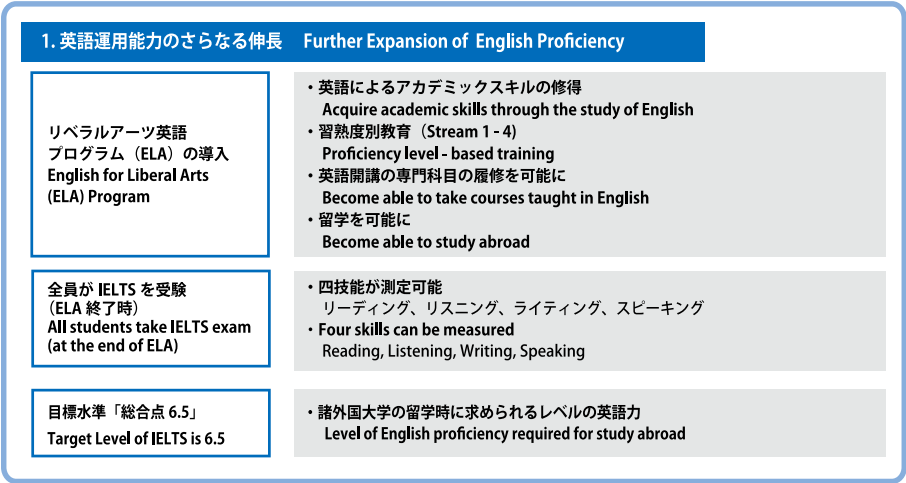
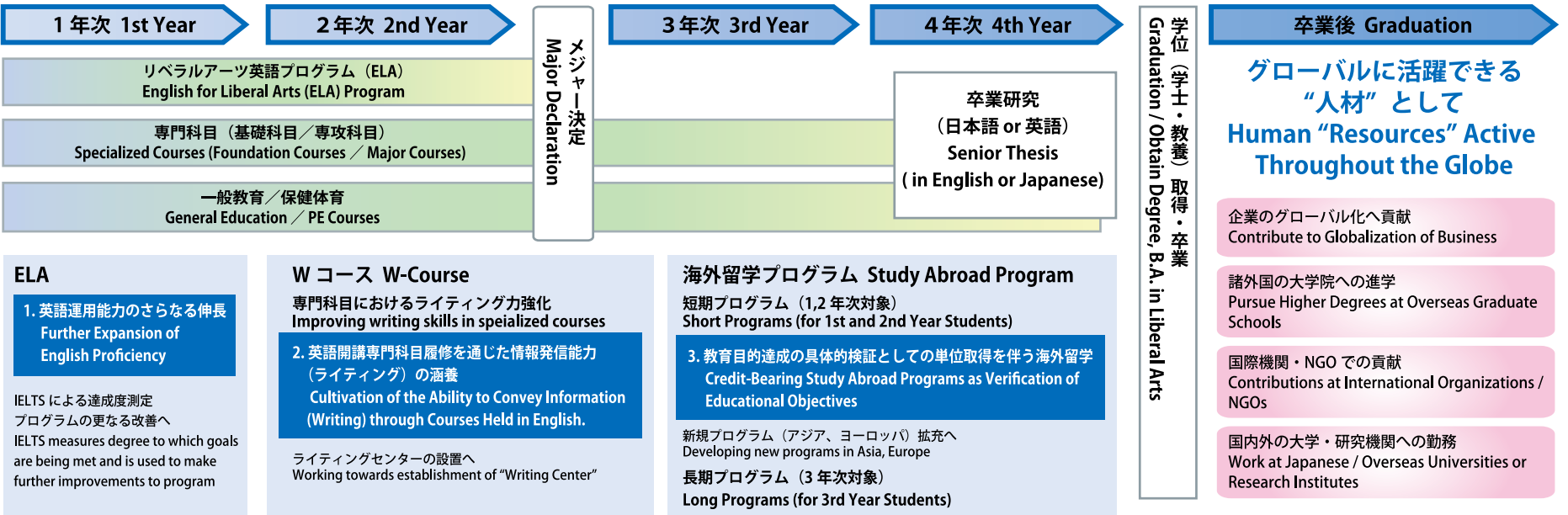
ICU is also seeking to address the difficulty the curriculum poses for students majoring in natural sciences. To do so, ICU is working with the College of Wooster, a liberal arts college located in the state of Ohio in the US, that is known for its rigorous science programs. Together we are

starting a cooperative education and research project this year. As one final measure to make study abroad more attractive, ICU has also increased the number of credits ICU students can earn through study abroad programs from 30 to 40.

Further Work Ahead

Moving forward, ICU is expanding the fields in which W-Course are offered, and will open new course in other majors in 2014. It is developing new summer programs with the Free University of Berlin and the Chinese University of Hong Kong and is planning events for fall 2014 that will promote the cultivation of ICU’s superlative global human resources.

ICU のグローバル人材育成プロジェクト／Project of Global Human Resource Development at ICU



Expanding Potential

ICU Project for Global Human Resource Development

ICU グローバル人材育成プロジェクトの取り組みを公開しています。ぜひご覧ください。

▶ <https://web.icu.ac.jp/global/>

We have released the website of Project of Global Human Resources Development at ICU. Please check the following URL.

▶ <https://web.icu.ac.jp/global/en/>

From The Alumni House

アラムナイハウスから

写真：一之瀬ひろ

「ICUのアートなOB紹介」について

文：村田広平 (24 ID80)

ちょうど1年前の3月に同窓会ホームページにもお知らせを載せて頂き、「ICUのアートなOB紹介」のホームページ (<http://temporary-icuart.jimdo.com>)がオープンしました。現在のように様々な分野にわたる同窓生の活躍をご紹介することができたのは、美術部OB会、現役の美術サークル、ICUアートプロジェクト、ICU同窓会事務局のご協力にも負うところ大です。そしてサイトの開設後は、活かしきれていない情報もまだまだありますが主に少数の方から多くの情報を頂いたお陰です。

孤軍奮闘していらっしゃるアート分野のICU OBの皆様には、お気軽にご連絡の上、私たちのサイトをご活用ください。また、そのような同窓生をご存知の方は、ぜひ情報を私たちにお寄せくださいますように、切にお願い申し上げます。これから本プロジェクトにご期待ください。

ID83リユニオン報告

文：佐柳智広、新村敏雄 (27 ID83)



2013年11月9日の土曜日、お昼すぎから大学食堂でID83卒業生のリユニオンを

開きました。初めてのリユニオンから5年が経過、ちょうど卒業30周年の節目にあたり、ご無沙汰している友人に会うよい機会になったと思います。地方や海外からの参加者も含めて107人が出席、北城理事長と日比谷学長をゲストにお招きし、和やかな雰囲気の中で歓談の輪が広がりました。

当日は、海外在住で欠席になるけれど話をしたい、という同期のために、スカイプで会場と同期の自宅をつなぎ、オンラインビデオチャットも敢行。FEPでシゴかれたボードマン先生も含め、海外3カ所から参加してもらいました。

二次会はアラムナイハウスへ移動。40人あまりが出席し、お開きになるころにはあたりはとっぷりと日が暮れていました。名残を惜しみつつ、家路につきました。みなさん、次回までお元気で！

ID85 SeptemberのReunion

文：木村静香 (29 ID85)



9月18日に丸の内オアゾの「えん」にて、米国から一時帰国した小暮ともこ Ireneさんを囲んでというのがきっかけで、ID85のSeptemberが集まりました。4、5人は

都合で来れなかったのですが計14名集まりました。(2名ほどAprilも混じっています)

関西支部会報告

文：近藤尚孝 (22 ID78)



10月5日に関西支部の2013年度同窓会を大阪、梅田のニョッキで行いましたので、ご紹介致します。

今回は、特別にICUより日比谷学長始め、多数の同窓会幹部の方にもご出席頂きました。とても楽しい、そして中身の濃い、又大学の事を皆様が改めて考える機会になったのではないかと思います。

同窓会は、まず日比谷学長のご挨拶から始まりました。とても分かりやすく、ICUのこれからの進むべき道について、そして今後あるべき教育の姿について語って頂きました。学長へのご質問タイムをもうけさせて頂き、2名の方からのご質問頂きました。この様なすばらしい機会が、皆様の更なるICUへのより一層の愛情を深めた事と思います。続きまして3名のICU同窓会幹部の方、会長を筆頭にすばらしいスピーチを頂きました。

更に突然の追加でスピーチが2～3件入り、最後までとてもにぎやかな会となりました。

同時にICUグッズの販売も同時に行いまして、かなり反響を呼びました。とても興味を引くすばらしいグッズが沢山並び、皆様にも沢山御買い上げ頂きました。これには、これは、安すぎるなどいろいろな嬉しいご評価も頂きました。

今回は総勢50名以上になり会場一杯の人となりました。

日比谷学長始めICU同窓会幹部の方、そして何よりも関西支部同窓会の皆様の沢山のご来席を頂き誠に有り難うございました。

来年も関西支部は、新しい発想で頑張って参ります。皆様の引き続きのご支援を賜りますよう御願ひ致します。

香港支部

アニュアルディナーの報告

文：黒岩千賀 (30 ID86)



12月4日、香港日本人倶楽部にて、アニュアルディナーを行いましたので、そのご報告です。今回のスピーカーは15期生香港からの元留学生William Wongさん。ICUで空手部に入り、香港に戻ってから

続け、現在八段。在学時代の写真や日本の武道と中国の武術との違いについてなど示唆に富み面白いお話を、一同大変楽しく、拝聴しました。

大学紛争のころの図書館の前にフェンスが張り巡らされた写真では、若いアラムナイが「アンボって何？」と表情をしているのをみて、元留学生の大先輩がその時に時代背景を説明するというシーンも。

今回の参加者は66年卒業から07年卒業までの幅広い世代から26名。欧米からのOYRで現在、香港に居住している参加者が多いのも当支部の特徴です。クロスカルチャー、クロスジェネレーション、日本語と英語を自由に行き来する、楽しい夜でした。

第36回ICU教育セミナー報告と、 第37回ICU教育セミナーのお知らせ

文：中山滋樹（27 ID83）

第36回 ICU教育セミナーが2013年も8月1～2日に本部棟で行われました。ICU出身の教育関係者を中心に、教育に関する学びと議論の場を作ることを目的として、年に1回のセミナーが開かれています。<前回（2013年度）セミナーの概要>総テーマ「教師の専門性を問い直す」

1. 基調講演：「日本の教育に貢献した知られざる教師」（影山礼子氏）
2. 討論：「教師の専門性を問い直す～自らの体験を語る～」
3. 研究発表：
 - (1) 「いじめへの対応」（加藤順子氏）
 - (2) 「生徒のモチベーションをいかに引き上げ、維持するか？」（田中武彦氏）
4. 講演：「思い出のインクリ」（並木浩一氏）

第37回ICU教育セミナーを2014年8月4～5日に予定しています。関心をお持ちの方は町田健一（icueducationseminar@gmail.com）へご連絡ください。

ICU 60周年記念事業 JLPを履修した本科生のリユニオン “Home Coming Day: Welcome back to JLP” 2014年5月24日(土)午後 開催予定

文：JLP Director 田中和美

大学の日本語教育課程（JLP）における日本語教育は、1953年開学と同時に留学生10名を相手に日本語クラスが始まり、60周年を迎えました。さらに、通称スペ

ジャパと呼ばれているSpecial Japanese Programが7名の学習者で1964年に開講されて、本年は50年目となります。これまでにJLPで学んでいった学生数は3000人以上です。

JLP・スペジャパで学習したみなさん、その後どのような道を歩んでいらっしゃるでしょうか。世代を超えて、日本語クラス、ICUで得たこと、その後の人生で考えたこと、思い出話で花を咲かせませんか。そして、JLPとICUのこれからのさらなる50年を見据えて、皆さんのエールをお待ちしています。

Watch out for further information on <http://www.icualumni.com/> and ICU Homepage

国際基督教大学献学60周年記念事業 第5回 ICUメサイア演奏会のご案内

文：平田為代子（16 ID72）



「ICUメサイア演奏会」は、2001年に大学献学50周年を記念して、卒業生を中心に第1回演奏会を行いました。その後、回を重ね、このたび、大学献学60周年記念事業の一つとして第5回演奏会を開催いたします。指揮者の長谷川朝雄氏とアルトソロの田辺いづみ氏は同窓生です。合唱は今回も卒業生を中心に、教職員の方々も参加してくださっています。

当日、客席とステージが共に大学献学60周年を祝う演奏会にしたいと願っています。どうぞご来場ください。

■日時：2014年4月12日（土）
15：30開場、16：00開演
■会場：杉並公会堂 大ホール（荻窪）
■指揮：長谷川 朝雄（日本指揮者協会会

員、元武蔵野音楽大学講師、ICU1期生、2007年DAY賞受賞）
■ソリスト：ソプラノ＝星川 美保子 アルト＝田辺 いづみ（26期生）テノール＝辻 裕久 バス＝キュウ・ウオン・ハン
■管弦楽：オラトリオ・シンフォニカ JAPAN
■合唱：ICUメサイア合唱団
■チケット：全席自由
前売り 3,500円、当日 4,000円
■チケット申し込み、お問い合わせ：「ICUメサイア」ホームページ <http://araiza.sakura.ne.jp/icumessiah/> e+（イープラス）でもご購入いただけます。
■主催：国際基督教大学、国際基督教大学同窓会、ICUメサイア実行委員会、ICU OGC合唱団

寄付者御芳名

ファミリーカイロプラクティック品川院&三鷹院
ART FOR THOUGHT/ 山際 百合子（45 ID01）
トラベル ICU
貴重な御寄付を賜り、誠にありがとうございました。

MISSING たずね人

池田 英人（35 ID91）
深見 淳（43 ID99）
森田 雄太（52 ID08）
古川 真宏（53 ID09）
動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報 Obituary

加美山 節 元財務副学長
小林 英智 名誉教授
平塚 保之（1）
越膳 雄治郎（4）
近藤 恭子（4）
片山 均（9）
岩瀬 純一（12）
岩本 光悦（12）
古屋 美耶子（13）
岡 直直（24 ID80）
心よりお悔やみ申し上げます。同窓会WEBにも訃報ページを新設いたしました。詳細は事務局までお問い合わせください。

事務局からのお知らせ

★ 広告募集！
本誌では広告を募集しています。フルサイズ6万円、ハーフサイズ3万円で承っております。ご興味のある方は、詳細を事務局までお問合せください

★ 原稿をお寄せください！
期会、リユニオン等の案内・報告をお寄せください。本誌およびホームページに掲載いたします。

★ ICU 同窓会とは関係のない名簿業者にご注意ください！
「人事新報社」という業者から名簿の申込みの往復はがきが郵送されているようですが、この業者はICU ともICU 同窓会とも一切関係がございません。個人情報の流出にはくれぐれもご注意ください。

★ 同窓会名簿について
同窓会名簿は2006年に発行されたものが最後となります。まだ在庫がございますので、購入をご希望の方は事務局までお問合せください。

★ 住所変更について
住所・勤務先・氏名の変更の際は下記同窓会ホームページの住所変更のページからお手続きください。 <http://www.icualumni.com/register/index.html>
携帯の方はこちらからどうぞ：



地方・海外にご転勤の際には、下記同窓会ホームページの支部一覧のページから、支部アドレスにコンタクトできます。 <http://www.icualumni.com/about/shibu.html#tab>

★ ご協力をお願いします。
大学の宣伝＝大学への支援という考え方から、同窓生の著作、雑誌インタビューなどには、略歴欄に「国際基督教大学卒業」とお入れいただけますよう、お願い申し上げます。

★ 四季が綺麗な ICU キャンパス。足を運ばれた際にはアラムナイハウスへお気軽にお立ち寄りください。
100円にてコーヒー・紅茶をお出ししております。なおラウンジ使用中にはご要望に沿えない場合がございます。

■大学・同窓会に関する情報が満載です。ぜひ一度ご覧ください。
同窓会ホームページ <http://www.icualumni.com/>
大学ホームページ <http://www.icu.ac.jp/>
JICUF ホームページ <http://www.jicuf.org/>
■ ICU 同窓会事務局
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320
Email：aaoffice@icualumni.com
■ 同窓会広報部（ALUMNI NEWS 編集部）
Email：kohou@icualumni.com

腰痛、頭痛、姿勢を改善させて、 更にICUに貢献する方法のご案内

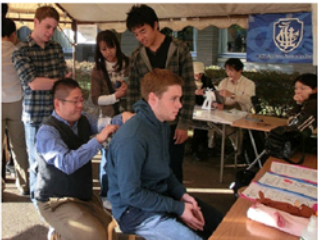
私、佃 隆は、ICU在学中に現在の妻が院長を務める品川のカイロプラクティック院に通院し、長年の猫背や腰痛、肩こりが解消し、学業、サークル活動、海外旅行を楽しむことができました。進路を考えた大学3年生の時に、みなさまの人生を豊かにするお手伝いができることを確信し、カイロプラクティックの勉強を始め、大学4年生の時に三鷹で開業し、今日に至ります。ICUへの感謝の気持ちを込めて、ICU関係者（ご家族含む）の初診来院の方がいらした場合は、初回料金7,000円の内1,000円分をICU同窓会に寄付をさせていただいております。体の調子を良くし、仕事に、学業に、子育てに、スポーツに楽しみ、当院からICUへの寄付を通じて貢献できれば幸いです。



健康雑誌ゆほびかで
佃隆考案のセルフケアが
8ページ特集



小冊子ご希望の方は、メール、
お電話でお問い合わせください。



ICU祭11年ボランティア参加
収益金は全て同窓会に寄付されています。

ファミリーカイロプラクティック 三鷹院&品川院



院長 佃 隆ICU44期（#00）国際関係学科卒
オーストラリア公立マードック大学健康科学学部
カイロプラクティック学科卒
健康科学士（カイロプラクティック）
開院時間：火・木・金14時～17時、18時～20時30分
土(月2回)：15時30分～16時30分

<http://mitaka-chiro.com/icu>

院長 佃 美香
オーストラリア公立マードック大学健康科学学部
カイロプラクティック学科卒
健康科学士（カイロプラクティック）
開院時間：月・水・金10時～12時30分、14時～16時
土(月2回)：10時～12時30分、14時～16時

<http://mitaka-chiro.com/mika>

*初回初回：7,000円（検査・カウンセリング）*2回目以降施術：5,000円

写真でみる三田会大会

日本で屈指の同窓会組織と言われる慶応大学の同窓会。

三田会大会は、三田会と呼ばれる慶応の同窓会が行う一大イベントだ。

千住明のコンサートから、仮面ライダーショーまで。やっぱり慶応の同窓会はすごかった!?

写真・文：樺島榮一郎（本誌）

慶応の同窓会はすごいらしい、という話は、たまにICUの同窓会でも話題にはなっていた。そんな折、慶応出身の北城格太郎理事長から「三田会大会」なるもののチケットが数枚、永淵ICU同窓会会長に渡された。ぜひ、見て来てほしいというのである。幸いにして、筆者も、そのうちの一枚をもらうことができ、2013年10月20日（日）に慶応大学日吉キャンパスで開催された大会に行ってみることにした。

「三田会大会」の名称は、三田会が地域や会社、職種などにより各自個別に形成される会であり（ICU同窓会の支部に当たる）、それが連合した組織が行う行事であることを反映したものである。例年、2万人以上の同窓生を集めて開かれるというこの行事、確かに参考になる部分がありそうだし、単に出来事としてみても、なかなか興味深い。今回は、臨場感を感じてもらうために、実際に筆者が行動した順序に並べた写真と、その解説を書いたので、以下の写真を見ていただきたい。



チケット。1枚2000円で5枚綴り1万円で販売される。下部には、福引抽選券と記念品引換券がつく



激しい雨にも関わらず、日吉駅を降りると、記念品を引き換える人の長蛇の列が歩道にまで伸びる（写真左側）。100mぐらいを2回折り返し、並木の下にある引き換えテントに行きつく。テントに行きつくまで約40分ほどかった



2013年は、震災復興プロジェクトとして開催されたため、スローガンは「今こそベンのを！」



記念品引き換えテントの手前には、記念品を一覧できるボードが設置され、在庫状況が示される。チケットの枚数により記念品が変わる。最高は10枚でクリスタルのグラスと写真立て付時計。列に並んでいる間もチケットを売りに来ていた意味を、ここで初めて理解した。毎年参加している知り合いに聞くと、腕時計（5枚）などは毎年コレクションしている人がいて人気が高く、開場前から並んでいる必要があるとのこと



引き換えたい記念品のテントに行き、記念品を受け取る



筆者は写真映りを考え、校章のマグネットにしたが、もう一つ残っていた紅茶の方が良かったか、と今、感じている



中央の広場までの道では、福引で1等のトヨタと日産の車の展示が行われる。写真の日産のテントはコンパニオンつき



中央の広場には、数十の模擬店が並ぶ



ほとんど全ての模擬店は企業のもの。他には釜めし弁当で有名な軽井沢のおぎのや、シューマイの崎陽軒、などのテントがあった



一部で有名なラーメン二郎も出店、テントが見えないほどの行列が。看板が黄色なのは二郎だけ



広場の一角の福引抽選所には、大きなスクリーンが設置され、抽選が行われていないときには、CMが流される



こちらは宅急便のテント。福引引換券の下1桁の数字で当たる、紙袋2つにもなる賞品の配送を手配する人々で混雑していた



校舎の玄関ホールで行われた、OBのピアノクラブによるコンサート。一人2、3曲づつ演奏を行い、交代する発表会方式



体育館には子供向けの企画が集まる。写真はプリキュアのアトラクション。この反対側には鉄道模型のジオラマが置かれる



体育館ステージでは、スバリゾートハワイアンズによるフラダンスショーと子ども向け教室が開催された



男の子向けの仮面ライダーショー



講堂でのメイン・イベントは、OBにして作曲家の千住明さんプロデュースのコンサート。写真は、千住さんの音楽に合わせて、歌舞伎役者でOBの市川右近さんが舞を披露しているところ。このほか、紺野美沙子さんの朗読などがあった。この三人はいずれも2013年の幹事となる83年卒業生に当たる年次



コンサートは、TV用カメラで撮影され、ステージ横のスクリーンに映像が流れる



当日配布されるフルカラー136ページのパンフレット。プログラム、福引景品の紹介、広告、実行委員紹介などで構成される。実行委員紹介は4ページにおよび、総勢1217人（数えましたとも！）。受付だけでも、222人のスタッフ。幹事となる卒業30年の年次と、それを支える卒業10年、20年、40年の年次によって構成される。写真は、福引のK賞（一番良い賞）を紹介するページ。ほかにE賞！賞O賞がある



OBが関係する全国の酒蔵を紹介するページ



裏表紙は、日清の専用広告

STAFF

EDITOR IN CHIEF
樺島榮一郎 Kabashima, Eiichiro (37 ID93 G1997)

EDITORS
野仲裕子 Nonaka, Yuko (48 ID04)
栗山のぞみ Kuriyama, Nozomi (34 ID90)
赤松弥生 Akamatsu, Yayoi (39 ID95)
佐々木淳子 Sasaki, Junko (44 ID00)
森川幹人 Morikawa, Mikito (47 ID03)
清水 裕 Shimizu, Yu (50 ID06)
小林智世 Kobayashi, Tomoyo (52 ID08)
日下部洋亮 Kusakabe, Yosuke (ID16)

PHOTOGRAPHERS
青地あい Aochi, Ai (42 ID98)
一之瀬ちひろ Ichinose, Chihiro (42 ID98)

ART DIRECTOR
佐野久美子 Sano, Kumiko (44 ID00)

PRINTING DIRECTOR
杉浦健一 Sugiura, Kenichi (小宮山印刷)

EXECUTIVE DIRECTOR
谷 摂子 Tani, Setsuko (33 ID89)

PUBLISHER
永渕光恵 Nagafuchi, Mitsue (21 ID77= 海老原)

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみなさまのために制作しているものです。今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみませんか？企画、取材、執筆、撮影、編集進行等を一緒にさせて頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいやれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

aaoffice@icualumni.com

表紙の絵「不連続面の研究010」八重攄理彦

「不連続面の研究」は、2006年から始まったシリーズ。岩手県、北上高地の最高峰、早池峰山の蛇紋岩の表面を拡大して描く。約 5 億年前に海の底深くマントル上部で生成されたという岩石の碧い色を山中で見つめている、その故郷である太平洋の深海にダイブしていくような感覚になる。しかしそのとき私は眼から網膜を通して自らの脳内に逆ダイブしているのである。眼が見つめている現実の石はわずか数センチにすぎないが、脳が見ている映像は身体全体よりも大きい。その感覚

を、絵画を通して実現したい。

タイトルの「不連続面」とは、地殻とマントルの境界 一早池峰の蛇紋岩の生成された場所— の呼称であると同時に、地表に現れた蛇紋岩の断面そのものを意図している。

このシリーズを中心に展示した2009年の盛岡市での個展が、岩手県教育委員会により平成 21年度岩手県美術選奨に選ばれた。

(この作品の所蔵先を探しています。ご興味のおありの方は、同窓会事務局までご連絡ください。)



194×324cm 水可溶性油絵具 キャンバス 2009年

